

ISSN 0910-3090

國語問題協議會報

平成二十四年四月二十五日發行

國語國字

第百九十七號

目次

第八十九回講演

一元化を排す

松本 徹

3

日本人と日本語について

市村 眞一

13

寄稿

美しい日本語の再発見(その一)

大喜多俊一

25

縦書の意識と感覺(その三)

若井 勳夫

30

文化傳承としての古典尊重と假名遣論

市川 浩

33

「假名遣存立の基礎」とは何か

上田 博和

36

見立てを誤つた文部科學省の證據改竄

上西 俊雄

38

國語大變

上西 俊雄

40

臺灣歌壇について

蔡 焜燦

42

私と國語

加藤 忠郎

44

日中英ことばの雜學(三)

高田 友

46

和歌

安東 路翠

49

後書

谷田貝常夫

51

題字・插書

近藤 祐康

一元化を排す

松本徹

■多層的多元的な文化

今朝の風で、京都の紅葉も終はつたやうですが、例へば嵯峨野を訪ねますと、觀光客が必ず立ち寄る場所として、野の宮があります。能の「野宮」、そして、その基になつた『源氏物語』の「賢木」の伊勢へ下らうとしてゐる六條御息所を、源氏が訪ねて別れを惜しむ場面がいやでも浮んで參ります。

このささやかな宮が名所となつてゐるのは、なによりもかうした故事來歴のためです。故事來歴なしに、名所は成り立ちません。

しかし、わが國には、いはゆる名所ではなくても、故事來歴に恵まれた地がいたるところにあります。

嵯峨野から流れ下つた桂川が鴨川、木津川と合流して淀川となり、やがて江口で難波と兵庫の大物浦（尼崎市）に分岐しますもの、平安時代、小舟を操る遊女がゐました。大江匡房『遊女記』、『更級日記』などに記されてをります。西行がその遊女の長妙と歌を交はしました。敕撰集「新

古今集」に收められて廣く知られ、『撰集抄』『沙石集』『西行物語』などにも取り上げられ、能『江口』、下つては浮世繪の題材にもなれば、幕末、長唄の舞踏『時雨西行』となつてゐます。そこでは遊女がじつは普賢菩薩の化現であるとされ、最後には白い象に乗つて去つて行きます。

この江口から、大物浦へ出ますと、淨瑠璃や歌舞伎の『義經千本櫻』のなかの「渡海屋」と「大物浦」の舞臺です。回船問屋を構へる渡海屋銀平が主人公です。舞臺は江戸時代も廻船問屋が榮える。この淨瑠璃が上演された頃（延享四年／一七四七）と思はれますが、源頼朝配下の者に追はれて、西國を目指す義經と辨慶一行がやつて來るのです。

とんでもない時代錯誤ですが、この舞臺の上だけで許される大膽奔放な設定がまことに面白い。そうして、船を出すのですが、渡海屋銀平はじつは壇ノ浦で海に沈んだはずの平宗盛なんですね。死なずに生きながらへてゐて、宗盛の亡靈を装ひ、義經一行に復讐しようとするのです。かうして、壇の浦の戦ひが今一度、大物浦で繰り返される。

江戸時代の淨瑠璃作者といふものほとんどでもないことを考へるものです。壇ノ浦の戦が繰り返されるなんて、生真面目な歴史家は眉を顰めるでせうが、少々無責任な歴史ファンにとつては、この上なく嬉しいスペクタクルです。

御存じのやうに義經一行は、大物浦沖で嵐にあひ、西國に向ふことができず、攝津の濱へ吹き寄せられ、吉野へ行きます。その嵐の中で起つたのが、生きてゐた宗盛が謀つた報復の戦ひであつた、といふわけです。

歴史的事實と『平家物語』『義經記』などを踏まへて、楽しい悪戯、そして卓越した劇的創作です。舞臺ではこんなことまで出来るといふ見本です。

もう一つ例を挙げさせてもらひますと、鴨川に架かる五條の大橋の一つ川上、松原橋——本來の五條大橋の跡に架かつてゐますが、これを渡つて清水寺へ向つて行きますと、六波羅になり、右へ折れると六波羅蜜寺になる。その丁字路が、今日も六道の辻と呼ばれてゐます。

六道とは、言ふまでもなく、人間が迷ひ輪廻しつづける、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六つの道です。人間は死ぬと、この辻に立ち、これまでの罪障によつて、いづれかの道を探らなければならないのです。

平安時代、このあたりが鳥邊山の入口でした。この辻を曲らずに進むと、左手すぐに珍皇寺ちんくわうじがあり、閻魔大王と小野篁たかもろ「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよあまの釣り船」で知られる人ですが、閻魔廳に通ひ、閻魔大王の仕事を助けてゐたといふ傳承があり、『今昔物語集』

『江談集』などに出てゐます。

この六道の辻と、珍皇寺は、八月の舊のお盆には、大變賑はひます。祖先の靈を迎へるために、櫓しきみを求め、鐘を撞かうと大勢の人が今もやつて來るのです。六道の辻は、傳承のなかだけでなく、今日も存在しつづけてゐるのです。

いきなりこのやうなことを並べ立てたのは、われわれが現に生きてゐるこの世界は、現に目に見えてゐる世界だけでなく、多層的多元的な廣がりを持ち、じつに立體的な構造を持つてゐるのです。そして、それゆゑに豊かなのです。もし目に見える、いはゆる現實だけとするなら、恐ろしく貧しく、平板で、退屈で、窮屈です。

いはゆる近代的合理主義によつて、六道の辻とか、地獄極樂などは大方抹殺されました。その代はりに飛行機に乗れば、世界のどこへでも、宇宙ロケットに乗れば宇宙にも行けるやうになりました。しかし、如何に遠くへ行かうと、所詮この世の中です。それは、結局の所、金と力、それに科學、そして健康志向・安全安心志向あたりが支配する、退屈な世界です。これでは結局のところ、厭世觀・虚無觀に陥るほかないのでは無いでせうか。

虚無思想は、現世主義と對立すると考へられて來ましたけれど、突き詰めれば逆です。今日の閉塞狀況は、この現

世一元主義、現實一元主義によるのです。

人間は、本來、このやうな窮屈な狭く貧しい現實だけに生きる存在ではありません。さまざまな層、さまざまな次元を抱へ持つて生きてゐる。生の豊かさ、文化の豊かさは、そのさまざまな層、次元をどれだけ多く抱へ持つかによるのです。

異次元の世界などと言ふと、不條理、不気味、夢想的な世界と受け取られるかもしれません。確かにさういふところも一部含まれませう。しかし、以上に挙げた例からも察せられますやうに、わが國の長い歴史、豊かに蓄積された古典、傳承などが軸となつてゐるのです。大きく誤ることはありません。

古來、古典や歴史を學ぶ必要が説かれて來てゐますが、これは優れた先人の足跡を知るだけでなく、分化本來の、多層的多元的構造を持つ世界へわれわれを導いてくれるからです。だからこそ、古典や歴史を大事にしなくればならないのです。

■ 祕密のマスターキー

そこにおいて歴史的假名遣がいかに重要であるか、會場ををられる方々には、お解りだと思ひます。

この假名遣ひのお陰で、わが國では千數百年も遠く遡ることが比較的容易にできるのです。これは驚くべきことです。シナやギリシアなどは、わが國と歴史こそ桁違ひに古いけれども、一般の人まで容易にそこまで遡れるかといふと、そんなことはありません。ところがわが國では、小學生や中學生が千數百年も前の柿本人麻呂や山邊赤人の歌を讀み、親しんでゐるのです。

その古典に觸れ、歴史をよく知り、文化本來の多層的多元的構造を承知するために、歴史的假名遣ひは、またどない祕鑰——祕密のマスターキーだと言つてよいのでせう。

現代假名遣ひではさうはいきません。今日の現實に密着するのを基本としてゐますから、今日の現實に簡単に引き寄せられてしまふ。

歴史的假名遣ひは、今日に密着も乖離もせず、適度な距離を保ち、普段に批評性を働かせ、かつ、歴史の奥深くと繋がる道筋を開いてくれるのです。書記言語として、まことに理想的だと言つてよいと思ひます。

しかし、今日の多くの人々はさうは考へず、現在只今、即刻、役立つこと、すなはち今日の現實への密着度はかりを問題にします。それが善だと信じてゐるんでせうね。最近、國語問題を論議するのが、もつぱらジャーナリストや

政治家、エコノミストたちになつてゐますが、さうした人たちであれば、當然でせう。

もつとも、先日、歴史的假名遣ひで書いて來られた丸谷才一さんが、文化勳章を受けられたわけで、小説では比較的許容されてゐるやうです。しかし、その他の分野となると、まづ受け入れられない。そればかりか、状況はますます厳しくなつてゐると思ひます。

■中途半端な對應

以上ざつと申上げた考へから、私はできるだけ歴史的假名遣で書かうと努めて來てゐます。

もつとも評論や論文、雑文の類ひは、現代假名遣ひで、小説なり、小説的なものは歴史的假名遣でと、分けてやつてをります。

書く機会が多い三島由紀夫については、三島の文章は、歴史的假名遣のまま引用しますが、私自身の文章は現代假名遣ひといふわけです。その一方、いま、菅原道眞が天滿天神になるまでを扱つた文章を「季刊文科」に連載してをりますが、これは歴史的假名遣ひ。説經「俊徳丸」に取材した文章を來春「文學界」二月號に發表しますが、これも歴史的假名遣ひといつた具合です。

評論や論文、雑文の類ひは、まあ、今日ただ今においての營爲でせう。多少文學的な營爲となると、今日只今に限定できない所を目指すべきですから、歴史的假名遣、と割り切つてをります。

このやうな私の對應は、中途半端、ゆゑ的と批判されるかも知れませんが、しかし、今の状況において、私のやうな非力な執筆者が、細々と書き、活字にしてゆくためには、仕方がないと諦めてをります。

ただし、このやうな姿勢では、歴史的假名遣ひに習熟するのが難しい。しよつちゆう、つまらない間違ひを繰り返してゐます。昨年、「風雅の帝 光嚴」といふ一冊の本を出したのですが、校正者の努力の甲斐あつて、間違ひはないと思つたんですが、出來て來た本を見ますと、帶の「對峙」の文字にルビが振つてあつて、「ち」とあるべきところ「じ」となつてをりました。たつた一字ですが、これにはガツクりました。

しかし、私は粘り強く、ある面では、臆面もなく、歴史的假名遣ひを使ふやう、努め續けてゐます。少々の間違ひがあつても、ご容赦くださつた上、御教授をお願いします。

■和數字の排除、洋數字への一元化

ところで最近、現代假名遣ひを貫く現實密着の考へ方をさらに推し進める、現實への一元化とでも言ふべき事態が幾つか認められます。

この十月からでせうか、新聞では縦書きの文章でも、數字は、和數字表記ではなく、洋數字（アラビア數字）の表記が行はれるやうになりました。和數字表記を排除、洋數字表記で統一しようとしてゐる氣配です。

これまで縦書きの文章に洋數字を用ゐることは、斥けられてゐたはずで、無思慮、無様な混用と捉へてゐたのです。ところが學術論文あたりから始まり、辭書、事典の類に及び、文學では村上春樹が始めましたね。數字を洋數字にするのがカッコよいとでも思つてゐるのでせうか。

最近の新聞記事（資料として配布）を見ますと、《3万人のランナーが大阪市内を驅ける第1回大阪マラソンは30日午前、號砲が鳴る。（中略）コース沿いに仮設トイレ700基が設置された。また、ランナーに提供されるバナナ6万本、水やスポーツドリンク計16万本など、飲食物の搬入なども行われた。》（「讀賣新聞」十月三十日付）

「第1回」と「30日」は全角と半角で、違つてゐます。「700基」となると、洋數字を縦に並べるといふ無理をしてゐるし、「6万本」や「16万本」となると、上に指摘

した違ひに加へ、万といふ和數字を都合よく使つてゐます。億とか兆も使ひますね。しかし、十とか百とか千とかはほとんど使はない。かうしたご都合主義、中途半端さ、そして混亂は、なによりも醜いと思ひます。

もう一つ、「朝日新聞」ですが、「2006年9月」とあるかと思ふと、「04年2月」とあります。どうしてかういふ表記が一つの短い記事で混用されるのか。

それに、「一連」「一審」と和數字を用ゐて表記されてゐますが、「一連」「一審」でもよいのではないかといふ主張も出て來るでせう。現にさう表記した記事があつたと記憶してゐます。また、1人とか2日とか1種類とか言つた表記も行はれてゐます。

このやうな表記を許容したら、どういふことになるでせう。

1巡、1姫2太郎、2つ返事、4つ足、4苦8苦、6道の辻、7變化、7難8苦、7轉8倒、9尾の狐、10重2重などと書きかねませんね。

今のところ、かうした書き方は抑制されてゐるやうですが、これらにしても數を意識した上での言葉です。だから、數の意識を希薄化してはならないのですが、數の意識は洋數字專一とすれば、當然、和數字では希薄化が起りませう。

九尾の狐が、九本の尻尾を持つ妖狐ではなくなつて來ます。

縦書きを本則とする日本語において、洋數字表記を用ゐるのは基本的に無理がありますし、異質なこの二つの表記を混用するのに、何らかの法則性があり得るわけでもないのです。

結局、場當りの、無理に無理を重ねた、醜惡な表記となるほかないのですが、それを代表的な新聞社が一齊に、取っかきしげもなくやり始めたのです。そして、寄稿者にも強要しかねない有様になつてゐます。

この言語としての合理性、統一性を無視して、利便性を押し立て、無理を通す姿勢は、明らかに歴史的假名遣ひを斥ける考へ方と一つです。

もしかししたら、かうしたことによつて起る混亂、不都合が織り込み済みで、それを解消するため、文章全體を横書きするところへ持つて行く算段かもしれません。

今日では、公文書がすでに横書きに統一されてをり、それに準じて、民間の會社の文書も横書きになつてゐます。また、教科書では、理數科は勿論、社會科、日本史の教科書も横書きです。科學的學問的な分野は横書きでといふ馬鹿げた理窟のやうで、日本史や日本語の學會誌さへ、敗戦後間もなくから横書きです。

しかし、日本史や日本語研究の基本的資料のほとんどは縦書きです。殊に漢文となると、横書きでは返り點など附けやうがありません。

これどうして、研究が可能なのでせう。

横書きが學問的なシルシなどと言つてゐた間はまだよかつたかもしれませんが。最近横書きが世界規準の表記法で、われわれ日本人も、といふ考へになつてきてゐるやうです。現在のところ、市販されてゐる大部分の新聞、週刊誌、雑誌を初め、單行本が縦書きです。しかし、いつ、全面横書きになるやもしれません。

紙の上に活字を印刷する形態では、なかなかさうはならないでせうが、電子書籍になると簡單です。いや、電子書籍の流布を待つまでもありません。現に最近は、新聞は讀まれず、ニュースはパソコンや携帯電話となつてゐます。そこではすべてが横書きです。

縦書きと横書きと、大して違ひはないと考へる人もゐるでせう。しかし、漢文にとつて致命的ですし、俳句や和歌ではどうでせう。「源氏物語」や「奥の細道」ではどうか？ それらは平假名表記と密接に繋がつてをり、その表記は縦の切れ目の少ない流れが重要です。

横書きになれば、それこそ1姫2太郎、4苦8苦、6道

の辻などと言つた表記も、簡單に行はれるやうになるでせう。また、歐米語などもその原語表記のまま入り込んで来る。横文字好きの官僚や學者方は大喜びするかも知れませんが、日本語自體に恐ろしく厄介な問題、正統的な表記、機能の破壊を引き起します。

そうして、何よりも、古典との距離が決定的になります。われわれの祖先なりわれわれ自身が今日まで營々として營んで來てゐる、縦書きによる日本語の成果を、一切合財、どうして過去の穴倉に葬らうとするのでせうか。

さうすれば薔薇色の未來へ一直線に進んで行けるとでも思つてゐるのでせうか。繰り返しますが、我々の生の豊かさは、多層的多面的な構造を持つ文化の在り方にあるのです。文化的貧困も極まつた、閉塞狀況へ落ち込んではありません。

資料としてもう一點、この十一月に活字になつた、野口富士男さんの『越ヶ谷日記』（越谷市教育委員會）の一節を掲げておきました。まだどなたも目にしたことのないものです。きちんと調べてゐないのですが、土岐善麿が「文化學院新聞」を横書きにしたのは、野口さんが在校した昭和六年から八年（二十歳〜二十二歳）のこのやうですが、野口さんは編輯を擔當するやうになると、即座に縦書きに

變更しました。「どだい日本文字なるものの横書きには不向きなる文字」だと明確に認識してゐたからです。

■元號無視、西曆への一元化

ついでにもう一つ、不合理で、大變な錯誤を呼び込む恐れがありながら、推し進められてゐる事態について、申し上げたい。

このごろは平成でなく、西曆の年を、西曆と斷らずに言ふやうになつて來てゐます。先に擧げました新聞記事に見られる通り、2011年とか、07年とかです。そればかりか、日本の歴史を問題にしても、元號は言はず、西曆の年數だけの場合が増加してゐます。

西曆はいふまでもなく、キリスト教起源曆です。キリストが生まれたのは正しくは西曆四、五年になるやうですが、キリスト誕生年を元年とした、キリスト教信者のための曆です。それも二十世紀初めになつて、キリスト教圈において統一されたものです。

それをどうして、キリスト教信者でもないわれわれが使ふのでせう。

曆はもともと當の地域の統治者なり宗教が定めました。統治には空間の區分けと、時間の區分けが必要だからです。

ローマカトリックにおいて、天文学に基づく曆學が高度に發達したのも、祭祀を行ふ必要からでした。

だから、カトリックとプロテスタント、ギリシヤやロシヤ正教とは曆が違ひ、フランス革命では革命曆が定められました。そして、現にユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教などは、それぞれ別の曆を持つてゐます。その曆はそれら宗教が生きてゐる限り、生きてゐるはずです。

その中でもローマカトリックのグレゴリオ曆が天文学的正確さを持つ太陽曆であつたことから、わが國では採用、明治五年十二月三日を明治六年（一八七三）一月一日とし、今日に及んでゐるのです。

確かに地球上の基本的な曆としては、これがよいやうです。しかし、だからと言つて、他の宗教や地球の曆に取つて替はることはないといふ心得で置かなくてはなりません。我々人間はあくまで地球上の具體的な一地域に暮してをり、その地域ごと季節も違へば一日の長さも違ひます。その他、風俗習慣信仰となれば、なほさらさうですね。基本的な曆は、太陽系においての地球の運動に基づいた、抽象度の高い曆で、そのため科學や地球規模のビジネスではまことに有用です。が、農耕や牧畜となると不都合が點が多くなる。

ですから、曆は一元化できない、と言ふよりも、無意味なはずなのですが、それを歴史の領域にまで及ぼさうとしてゐる。しかし、そのやうなことをすると、大變厄介なことになります。

例へば、赤穂浪士の討入りは元祿十五年十二月十四日ですが、元祿十五年に對應するのは、西曆一七〇二年かと言へば、さうはいきません。嚴密に換算すると、翌一七〇三年一月三十日になります。元祿十五年の師走に起つた事件が、翌年の春の出來事になるわけで、かうなれば、討入が行はれるはずもないですね。換算は無意味で、せいぜいのところ日の出、日の入りの正確な時間を知る上で役立つだけです。

明治に活躍した小説家の田山花袋と徳田秋聲ですが、花袋は明治四年十二月十三日生れ、秋聲は同い年で十二月二十三日生れですが、明治五年の十二月が明治六年の一月になつたため、満一歳の誕生日は迎へてをりません。ですから、満年齢は數へやうがないし、誕生年も西曆で一七八一年とも一七八二年とも言へるわけです。

かうしたことは、明治五年を跨いで年を重ねた人すべてに言へます。

このやうな不都合があるにも拘はらず、西曆一本槍の人

は忠臣藏の討入りを一七〇二年十二月十四日と言つたり、時には、一七〇三年一月三十日と言つたりするわけです。

最近はずすがに討入りを一七〇三年一月三十日などと言ふ人はゐなくなつたやうですが、しかし、一七〇二年十二月十四日とするのも奇怪で、あくまで元祿十五年十二月十四日でなくてはなりません。

こんなふうには西暦を持ち込むと、とんでもない齟齬、錯誤を抱へ込んでしまふのです。その點を、よくよく考へなくてはなりません。

どうも年月日は、その日その日に附けられた名前に等しいものと捉へるべきなのかもしれません。掛け替への無い、一日一日なのです。

保守の立場を採りながら、平氣で西暦を用ゐてゐる人が案外多いのはどうしたことせう。

勿論、元號だけでは整理が難しいし、不便なので、元號による年に西暦に對應した通し番號を附ければよいと考へます。昔は元號の年月日とともに、干支による、十干と十二支の組み合わせを併記しましたが、それに代はるものとして用ゐるわけです。

ですから、《元祿十五年（一七〇二）十二月十四日》と言ふふうには表記するのがよいと考へます。元祿十五

（一七〇二）年とは書きません。括弧の中は、西暦ではなく、あくまで西暦に對應した通し番號だからです。

現在の曆になる明治五年以前は、こんなふうには對處するよりほかないと思つてゐます。

それなのに、宗教を認めないはずの、知性を誇る人ほど、西暦を使ひたがる。西暦は進歩したニュートラルな曆だと信じてゐるんですね。しかし、西暦はあくまでキリスト教起源曆です。それを異教徒のわれわれが用ゐてよいかどうか。キリスト教を排斥するのではなく、その曆として尊重するばこそ、却つて使へません。

それに何よりも歴史の領域に持ち込むと、いかに科學的でニュートラルな曆であつたとしても、とんでもない間違ひを犯すことになるのです。限界を正確に知らなくてはなりません。

■まとめ

以上、世界標準と思はれる——今日の大勢の日本人がいつしか勝手に信じ込んでゐる在り方へ一元化する動きは、不合理だし、さまざま齟齬、錯誤をもたらすのです。その齟齬、錯誤は無視してもたいしたことがないやうに思つてゐるかもしれませんが、師走に起つた事件を、年を越え

て春とするやうなことは致命的です。

そのやうなことさへ解らなくなるのも、我々が生きてゐるこの現在を中心に据ゑて恥ぢない姿勢を採つてゐるからです。この現世を便利で都合のよい状態にすれば、すべてが許される、と信じてゐるんですね。

だから、歴史的假名遣ひなど、どうでもよく、數字は洋數字表記に一元化すればよく、西曆もそのほうが便利だ。何年前とか、何年後は即座に判明する。西曆に一元化するのがよい。言葉も出来れば英語に一元化すれば、貿易もなにもかも容易になる。だから、小學校から英語を教へよう。日本語なんか身につけさせる必要はない。

しかし、そんなことをして、どんな世界をつくらう、どんな人生を人々が生きるやうにしようと考えてゐるのでせうか。

豊かな文化は、その一文化圏内において、すでに多層的であり、多元的であり、それらがさまざまなかたちで交叉し、溶け合ひ、時には反撥しあふ。そのやうな運動が絶えず働いてゐてこそ、われわれの生は豊かになるのです。國際化も、さういふ文化圏の交流でなくてはなりません。

これは精神論でも何でもありません。日常、日々の暮らし方なのです。

さう考へて、出来る範圍ですが、わたしは歴史的假名遣ひで書き、機會があれば古典に言及し、元號は必ず使ひ、西曆は通し番號として扱つてゐます。

このやうな會にお招き頂き、かうした話をする機會をお與へくださつたことに感謝します。

(まつもととほる 作家・評論家)

向

日本人と日本語について

市村眞一

はじめに

私は經濟學者ですが、四十歳くらゐからアジアの低開發國の發展を研究して参りました。低開發國研究と歐米や日本のやうな先進國研究と根本的に異なりますのは、經濟發展と「國づくり」が同時に行はれることです。經濟學は普通、國はできてをるといふ前提でものを考へますが、アダム・スミスの『諸國民の富』といった古典は、單なる經濟發展だけでなく、どういふ國づくりをするかを合はせて議論してゐます。彼は、その本の後で、『道德感情論』を書きましたが、晩年のスミスは、人から『國富論』のことを問はれると、「もう忘れしました」と冗談を言つたさうです。ことほどさやうに、經濟發展も初期には國づくりや國民道德と關係が深いのです。

最近はこの分野にも多くの優秀な學者の研究があり、ノーベル賞をもらつた人が四、五人も出てゐますが、經濟學者が言ふ國づくり論はまだまだ片手落ちで、立派な仕事は政治學者や社會學者が多いのです。私などもアジアの

國々をいろいろ調査研究しましたが、細部に立ち入りすぎで、晩年の今、アジアの國づくり論をまとめねばと思つてゐます。

今日お話ししますのは、そんな關係でアジア諸國の勉強をしながら知つた日本の國づくりの初期に、日本人が、大和民族が、どういふふうにして形成されたかの概略、また日本の言葉、日本語が、どういふふう形成されたか、その特色は何か、といったことに關する私の知見のあらましです。自分の頭の中にあつたものを御參考になるやう一應整理しました。大きなテーマは三つです。

- 1、日本人は一體どこから來たのか。
- 2、我々の主食の稻の傳來とどう關係するか。
- 3、同じ言語を話す大和民族はいかに形成されたか。その言語の特色はどんなものか。

大和「民族」といふ集團の形成には、同じ言語を話すといふことが不可缺ですが、どうしてさうなつたかは、この三つの問題の解明が必要です。その鍵となる傍證は、日本人が食べてゐる稻Ⅱ米がどこから來たか及びその他若干の視點です。これによつて日本人の生活と集團形成の謎が解ります。これは、京都大學の東南アジア研究センターの所

長を十年間やりました間に、京大の多くの専門家達から學んだことです。

日本語が言語としてどういふ特色があるか。それが日本人の心、精神とどう關係してゐるかは、最後にお話します。

一、日本人はどこから來たか。

御承知のやうに、氷河期が終りますと、氷河期を辛うじて生き延びた人類は急激に人口が増え大移動を始めました。それがいかに大規模だったの一例は、アメリカインディアン（インディアンの赤ちやん）のお尻にモンゴル斑があつて蒙古系だと分ることです。もう一例を言へば、インドネシアの東端のニューギニア島には、少數ですが、アフリカ黒人と同じ黒人が住んでゐる。それは、アフリカ黒人の主力は北に向つたが、一部はインド洋をどういふ手段かで渡つてニューギニアに到達したことを示す。物凄い移動であります。

その頃の日本列島周邊では、冬北の凍つた海は雪原で續いてゐた。日本海の最近の地質調査によりますと、日本海の真ん中には大きな島があり、非常に浅いさうです。現在でも水深二百メートルくらいと言はれる。大きな島が真ん中にあつた。凍つたら、日本海を通過してシベリアとは歩いて來れた。長野縣の野尻湖に、小さなマンモスの骨が発見

されたのは皆様よく御存知でせう。ナウマン象です。それは明かに歩いて日本列島へ渡つた。

日本人を大和民族として形成した集團には、大別して三つあつたと思はれる。氷河期後の大移動時に、北方から、極北シベリアを経て北方からナウマン象と共に日本列島に流入した集團があつた。これが集團Ⅰであります。

當時、シナ大陸と臺灣・沖繩・九州は陸續きであつた。それを證するのは、大陸と日本列島の植生と動物が同じことである。有名な中尾佐助教授の「照葉樹林文化論」(二四頁参照文献4)はそれであり、ヒマラヤの高原地帯から日本列島の關東地方まで代表的植物(杉・松・檜・櫻・竹・檜・かへで等)が共通してゐる。また日本猿等は大陸の猿等と同種である。日本列島に渡來した第二集團は、ヒマラヤの北壁からチベットや中國の奥地にかけての地帯に住んでゐた集團が、揚子江の南岸沿ひに、ぶうと上海あたりから、だんだんと日本の沖繩九州へ到達した集團である。集團Ⅱと呼びませう。

何萬年か前からだんだん氷が解け、東シナ海邊の水位が上がつて大陸と切斷されて海になつた。朝鮮半島と日本列島の間の對馬海峡は、氷河期の後の寒い時でもずうと切斷されてゐたといふ。中國の南部の沿岸地帯と東南アジアか

らは、船に乗らねば往來できなくなつた。さうなると、舟行が得意な種族が出てきた。海上生活、水上生活をする部族は、ボルネオ、カリマンタンにゐるブギス族のやうに、今でもゐる。彼等が東南アジアや中國南部の沿岸地帯から船に乗つて北上し始める。やがて、フィリピン、臺灣、沖縄、九州と來て日本列島に辿り着いた。これが集團3であり、この集團が海上の連絡役として大きな役割を果した。

以上三集團が日本列島に到着、融和し協力し交流した。

集團1と集團2は、ウラル・アルタイ語系の言語を話した人達であり、言葉の單語は違つたでせうが、文法は同じだつたと思はれる。ただ集團3は、東南アジアのマレー・ポリネシア系の住民が多く、ウラル・アルタイ系でない別の言葉、多分マライ・ポリネシア語系の言葉を喋つてゐた。しかしその人達はしよつちゆう動き回つて交易を媒介しましたから、やがて次第にウラル・アルタイ系の言語を習得したと思はれる。集團2と集團3とは、日本建國の一萬年くらゐ前から、密接な交流を持つたに相違ない。彼等が日本人の主力部隊になつたと思はれる。これを傍證する話は後にする。

日本人の起原の研究者として有名なのは樋口隆康博士、京都大學の文學部の教授だつた方で、もう亡くなられたが、

長く奈良の考古學研究所長をされた。その人の「日本人はどこから來たか」(二三頁參照文獻1)は主として集團2のことを書いてゐる。集團3について書いたものは少ないが、後に述べる福永教授の言及が少しある。

古畑教授の血液型の研究

それを別な觀點で研究されたのが、古畑種基東醫學部教授の「血液型」(二四頁參照文獻2)である。専門書もあるが、古畑説によると、中國の奥地に住んでゐた諸部族の血液型を調べられたところ、戦前のことですが、四川省の邊りはかなり大きな集團の血液型の分布が日本人に似てゐた。血液型には、御存知のやうに、A型B型AB型O型とあるが、その4型の分布割合は、民族ごとに特色があつて、その比率が餘り變らない。といふのは、昔はあまり部族間の通婚が行はれませんでしたから、大きな集團が同じ所に長く留まつてをりますので、分布が大きく變らない。例へば、日本人の血液型の分布を調べますと、全國のうちで、九州から瀬戸内沿岸、京都、大阪、奈良、和歌山、三重あたりまでの地域と、それ以外の地域、日本海沿岸と關東東北の血液型の割合ははつきりと異なると古畑先生は書いてをられる。その西日本側の集團の血液型の分布と非常に良く似た

集團が四川省のあたりに住む種族にあつたといふ。

中國の少數民族

私も興味を持つて、中國の少數民族のことを中國の百科辭典で調べたことがある。日本では殆ど知られてゐないが、中國の奥地には多様な少數民族が多數居住してゐる。少數と言つても、二百萬前後かそれ以上が多い。例へば、白族といふのは、人口が二百萬くらいだが、部族の特色が非常に日本人と共通してゐる。例へば祖先崇拜、崇拜する場所の入り口にある鳥居のやうなもの、肌が色白など。また歌垣の習慣が残つてゐる。萬葉集に出て來る歌垣です。他にも似たことが言へる少數部族はゐる。色白の點は、集團2も、シベリアから來た集團1の方も同じだが、東南アジア系の集團3は違ふ。古畑教授の調べられた部族は、どうも集團2と關係があつたかも知れない。さういふことから考へて、日本人を形成した集團はそれ等の三つと推察しないし假定できるのであります。

集團3の重要な役割

恐らく、集團1は早くから日本列島の各地に到着して、長い長い間分散獨立して暮してゐたのではないか。別に西日本に來た集團2と3が、先に融合した。そして、船に乗

つて動き回るのが得意な2+3聯合集團が、あちらこちら動き回り、集團1を含む各地の日本人間の交流と融合を進めたのでせうか。したがつて、日本語といふ共通の言語が形成されるのには、集團3が非常に大きな役割を果したと思はれる。その頃、即ち今から大體一萬年から二千年位前までの間に、日本列島周邊では、その人たちによつて非常に廣い範圍で交易が行はれてをつた。それは特定地域特産の玉や刀劍が各地に發見されたり、沖繩方言と北海道方言に共通性があることなどから傍證されます。

人種的あるいは種族的に多少異なる三つの集團が、主として東南アジア系の人たちの媒介によつて交流したことが、古代の大和民族の形成に大きな役割を果したことを傍證する研究は、いくつもあるやうです。例へば數詞、ひ・ふ・み・よ・い・む・な・や・こ・といふ日本語の本來の數詞ですが、これは、ツングース、滿洲族の數詞と三か四までは共通してゐるといふことを新村出博士が發見されました。世紀の大發見と言はれてをります。日本語で數詞が形成される頃には、日本の言葉の中には、ツングース系、滿洲系、兩者の違ひは僅かですが、さういふ種族が非常に大きな影響力を持つてをつたのでせうか。

また、宗教面で言ひますと、集團1は、日本の古典では

國つ神を仰ぎ、集團2+3は、天つ神を仰いでゐたと傳へられ、神武天皇が橿原宮で即位せられたときには、天神（あまつ神）地祇（國つ神）を祀つて、両方の集團の神を一緒に祀つて融和されたと傳へられます。信仰面で若干違ふ部族が和合したことは、それまでに言葉の面でも相互理解のできる日本語が出来あがつてゐたに相違ない。

二、稻の海上の道その他の傍證

以上の推察の傍證はいろいろあるが、先づ重要なのは日本の稻である。稻は普通ジャポニカとインディカの二種と言はれるが、實は三種類ある。インディカはいはゆる外米で、細長くて味が良くない米です。ジャポニカは、ちよつと粘り氣のある、我々がふつう頂いてゐる米です。専門家に聞きますと、もう一種類ある。それは學術名がジャヴァニカといふ。ジャヴァニカは、實はインドネシアから來た米なのです。インディカ米は十一世紀に大唐米といふ名で文獻に残つてをり、当時新しく入つた。日本の古事記や萬葉集の七、八世紀頃にはインディカ米はなかつた。その前、繩文時代の晩期彌生の初めに、米が日本に入つたが、それは實はジャポニカとジャヴァニカ兩方がほぼ同時に混つて入つてゐる。専門家は、この研究をきはめて嚴密にやつて

ゐる。それをまとめたのが京都大學の渡部忠世教授（二四頁參照文獻7）、私の後で東南アジア研究所長を務めた人で、私より一つ年上で御生存です。渡部さんが一九九九年九州で行はれた講演が要領よく研究報告してゐます。それによると、ジャヴァニカは、九州や沖繩だけでなく、全國津々浦々の米の中にその遺傳子が入つてゐる。東北の米にまで全部入つてゐる。従つて、今やジャポニカとジャヴァニカとは區別できない。ジャポニカの方は中國大陸から入つて來た。チベットから揚子江沿ひにずつと入つて來た。（一部は、山東省から朝鮮半島を経て日本に入つたのもある。遺傳子が違ふので分るのださうです。）現在の米では、ジャポニカとジャヴァニカの區別はつかないが、古い米ですと分る。古い米のサンプルが残つてをり調べられる。従つて、米の流れで言ひましても、中國南部から臺灣・沖繩を経て日本に入つた米、あるいは集團2と、それから、一部は朝鮮半島を経て入つたのと、それから東南アジアから入つた集團3が、交流しつゝ、融和して、大和民族の主力になつたのが判るのです。北から來た集團1は、それと交流融和しながら、少し色合ひの違ふ信仰と生活様式を持つて、日本海沿岸沿ひや太平洋沿岸沿ひに近畿地域にまで進んで行つたのでせう。

山彦と海彦の話

信仰面は、前述のやうに天つ神と國つ神の違いがある。生活面で言ひますと、海彦山彦の物語が示すやうに、主として海を生活の場とした人と、山を生活の場とした人々がゐた。大雑把にいへば、山の民が集團1であり、海の民が集團2+3ですが、両方が融和して日本人ができたと思はれます。

天孫降臨神話

この集團1と集團2+3の多少の違いは、大林太良東大教授の神話の研究(二四頁参照文献6)からも分ります。我々には周知の天孫降臨神話は、日本にあるだけでなく、全部ではないが、アジア諸民族に廣く分布してゐます。朝鮮半島にも沖繩にもあり、その他中國の少數民族にもある。しかし、東南アジアのインド系の諸部族、ヒンズー教佛教を持つてスマトラ、ジャワへ入りました部族などにはありません。天孫降臨神話を持つ集團は、ヒマラヤの北壁の方へ降りて、そこからあちこちに分流して行つた部族です。日本の神話ほど詳しくなく、中で一番整頓されてゐるのが日本神話である。従つて、神話の面から見ても、北から來た集團1も、江南から來た集團2も、元をただせば同じ源

流に屬した人達であつたのは、ほぼ間違ひないと思はれる。

朝鮮族との異同

ちよつと話がそれで恐縮ですが、朝鮮族との關係はどうかについて一言します。韓國の學者には、日本の古事記などに書かれてゐる天孫降臨は、朝鮮半島から九州に來たので、朝鮮族が大きな役割を演じたやうなこと言ふ人がをられる。しかし、先ほど申した集團1も集團2も、言語學的に見ても移住の經路から見ても、朝鮮族の祖先の集團とは違ふと思はれる。ずうと太古に遡れば恐らく同じウラルアルタイ語族から分れたでせうが、朝鮮族は、バイカル湖の南邊りから滿洲をへて朝鮮半島の北部へ移住したのであり、日本に到達した部族は、もつと東のシベリアからずつと日本海を渡つて日本に入つた集團である。

この二つの集團がはつきり異なると判るのは、日本語と朝鮮語の基本語に共通語彙が、殆どないからです。基本語とは、専門家に聞きますと、目とか鼻とか耳とか口とかおつぱいとか、さういふ人間の日常生活で使われる基本的な用語で、最も原始的な時代にできる言葉です。それが朝鮮語と日本語では共通してゐない。滿洲語やツングース語には少しあるらしい。といふことは、極めて早い時期に、兩

族は獨自の違つた經路を進み、違つた集團としての發展の仕方を數萬年したことを證明します。二千數百年くらゐ前から再び半島と九州で接觸が始まるのですが、それは歴史時代で、日本の古典には朝鮮族がたくさん出て來る。例へば、北九州の「イヨ」は明かに朝鮮族の「くに」と書かれてをります。その他、日本の各地に、朝鮮族が住んでゐたことは明白です。そののみならず、シナ人も相當數移住して來たと思はれます。日本の文獻よりも中國の古典に出てゐる。道教の研究で知られる福永光司先生のお話によると、隋史のなかに日本訪問記があり、それに瀬戸内の岡山邊りに假泊したら中國語が通じる集團がゐたとの記録があるさうです。福永先生は、シナ人の日本移住も少なくないだらうと推察してをられた。

實は今年の十月韓國に招聘された時に聞いた面白い話をお傳へしたい。それは百濟のことです。「百濟」といふ漢字を「くだら」と讀ませますが、あれは元々「くだら」といふ言葉への當て字で、日本讀みでは勿論、韓國讀みでも百濟は「くだら」とは讀めない。韓國の李何某という學者の話ですが、かねがね「くだら」は不思議な言葉と思つてゐたが、實は最近のロシア旅行中に、「くだら」といふ名の地がバイカル湖の南方に現存することを發見したとい

ふ。彼は、百濟の支配者はそこから來たのではないかと推察してゐました。要するに、大和民族と朝鮮族との關係は部分的斷片的接觸で、歴史的民族的に長い接觸はなかつたのです。これは韓國の一部學者の説とは大きく異なります。ともあれ、このやうにして、日本人の三集團は一體化して大和民族となつたのです。今まで述べてきた大和民族成立の要件は、次の三つに要約できるでせうか。

1. 集團の同質性と團結—血縁・地縁・交易・協働
2. 信仰の和合・信條の共有—天神地祇とひの神信仰
3. 言語の統一、相互理解、道德的秩序

ひの神の信仰と皇室の敬仰

そこで、日本語の統一の問題を論じる前に、もう一度信仰の和合のことで追加すべきことがあります。既に、集團1は、古く東北、日本海沿岸に入つたが、そのくにつ神信仰は、自然崇拜と祖先崇拜が中心だつたこと、集團2は、西南諸島から九州に入り、集團3と融和し九州から瀬戸内海沿岸を支配し、そのあまつ神信仰は祖先崇拜とくに天照大神の敬仰であつたことを述べた。日本の古代史研究でこの點を指摘し、強調したのは、皇學館大學の田中卓博士で、國つ神の大三輪神社の山岳信仰と天つ神の天照大神の信仰

の和合が日本の信仰形成の原點とされた。(田中卓著「日本の建國史」國民會館叢書參照)これが日本人の宗教心の、根底となつた結果、日本人は、一方では山岳を神と仰ぎ、草木も川も水も神が宿るといふ自然信仰をもち、同時に祖先を崇拜し、そして建國の苦難の先頭に立つて乗越えられた皇室への尊敬を高めて、日本人の信仰心の中核が出来た。この信仰心の和合が大和民族を團結させ、日本國を形成したのですが、これにただ一點追加したいことがある。それは、日本人の信仰の中で、太陽信仰——ひ(日)の神の信仰——が非常に強いことです。「天照大神」といふやうな言ひ方にも、それが現れてゐる。この日の神や太陽信仰に、私は集團3ないし2+3の影響があると感じます。

マレー語で火(ファイア)をアピと言ひますが、臺灣の高砂族やフィリピンの山岳民族になりますとピーと言ひます。ピーがヒになつたと思はれる。したがつて、太陽を信仰するのは日本人の非常に古い信仰の中に、太陽信仰があつたに相違ない。それが證據に、日本人は朝日を仰げる所を好む。日本列島で最初に選んだのは宮崎縣、天照大神をお祀りする場所が伊勢、水戸の鹿島神宮、古くから高く尊崇し今もしてをりますのが大分の宇佐神宮。みな太陽が海上から上がつて來る所を拜める場所です。日本人は旭日昇

天を敬仰して來た。これは山岳信仰とは違ふ起源だが、それを共通に持つてゐるのが大和民族の古代人の心ではないかと思ひます。天照信仰の中には、太陽信仰がこもつてゐるのです。

さて、民族形成の一步前を考へますと、やはり日本語といふ共通言語ができたことが根本です。民族の紐帶は言語です。言葉が違つたままで一つの國にまとまることは、近代ではあるが、古い時代にはない。ローマ帝國が出來上りまして、ローマの言葉、ラテン語がずつと全領域に廣まりました。だからこそ、その後、フランス語、スペイン語、と別れまして、ラテン系諸民族は相互理解が可能で、一體感は存續してゐる。ゲルマンも同様。ドイツ人、スエーデン人、ノルウェー人、デンマーク人は、ゲルマン系の言葉ですから、ちよつと勉強すれば相互理解可能で、特に勉強しなくてもできる。英語は、ゲルマン系ですが、ラテン系の語彙が多いので、すぐには分からないが、日本人が漢文を學ぶよりも、ずつと易しく、イギリス人はフランス語、フランス人は英語、ドイツ人は英語を學ぶことができる。言葉が大事で、日本語はどうか、最後の問題です。

三、日本語の統一と特色

言語には、私は素人ですが、多くの外國語を勉強しました。中學では英語、大阪外語でインドネシア語とオランダ語、大學へ行つてからフランス語ドイツ語をやり、後にロシア語をかじりました。言語研究には何らかの記録が要ります。日本語の場合には、萬葉集・日本書紀・古事記・風土記など、日本語の形成途上の貴重な資料がございますので、恐らくインドアーリアン言語に負けない言語研究ができると思ひます。馬淵和夫先生が國語學史の書物を出されたやうでございますが、讀みました参考文献の中に「五十音圖の話」(二四頁参照文獻9)があり、拜見して多くを學びました。日本語について氣附いたことを一表にまとめました。

第一に、多くの外國語を學習して、日本語が壓倒的の言葉と比べても劣らないと思ふのは語彙の豊かさです。例へば、源氏物語とシエークスピア全集と比べられた方がありますが、たつた一人の著者の源氏物語で使つてある語彙の數と、シエークスピア全集に出てくる語彙の數と、どややつて比べたのかは正確には存じませんが、色彩の數、植物の數等、斷然源氏物語の方が多いと學んだ。源氏の方が、五百年以上古いのに。

それから、食べる際の口の動きで、噛む、かぶつく、齧る、

嚙る、食らふ、飲む、食べる、舐める、しゃぶる、ねぶる、と云つた表現がある。これに對應する英單語は、ほぼ一つづつある。嚙るでしたら chew でいいでせうが、しがむ、はよう譯さない。日本語がいかに豊かな表現力であるかが分ります。

戦ふ、争ふ、あらがふ、いさかふ、いがむ。等も異語同義だが、すこしづつ違ふ。

タッチにあたる言葉でも、さはる、さする、ふれるなどある。このニュアンスを英語で表はすのはかなり難しい。表現力と語彙の豊富さでは、日本語は實に素晴らしい。

更に、勝手に「一般的動詞」と書いたが、それは「する」「える」「なす」といふ、英語でいふと、do とか make や go にあたる、他の單語にくつついて動詞化できる單語です。仕事するとか、といふ式に便利に使へて、非常に表現力を増した柔軟にする。

また造語力ですが、英語ドイツ語は、ラテン語と比べますと、造語力で劣ると云はれることがある、日本語もあまり造語力がなくて、漢字が入つてきて漢語を使つてから、造語力が出来たとおつしやる方がある。果してさうか。例へば、複合動詞による造語力を考へて見ると、「見る」といふ言葉から、見返す、ながめる、顧りみる、見直す、見

渡すといふやうな、複合動詞を非常に巧妙に作れる造語力がある。形容詞には、大きい、小さいといふやうに、後ろに「い」をつけ、また大きな、と「な」をつけて形容詞ができる。また「大きさ」とか「美しさ」とかいふ、「さ」といふのは、ドイツ語でいへば *schön* みたいなもので、大を抽象的な表現にして表す言葉が、接尾語としてちやんとある。

私は多くの翻譯もしたが、ドイツ語や英語を日本語に譯すときに、日本語の適切な表現がなくて苦勞したことはごくごく稀です。ですから、造語力で日本語が劣るといふ人はをかしい。それにプラス漢語の採用が萬事を解決した。

もう一つ私が前から日本語の特長と思ふのが、日本語の動詞は連用形で名詞を作ることです。例へば、「戦ふ」が「戦ひ」になる。英語で *fight* が *fighting* になるやうに。それとは別に *war* といふ言葉があるが、同じやうに日本語にも、別に「いくさ」といふ名詞が存在する。「いくさ」も古語辭典による、何かから出來た言葉らしいが、さういふ使ひ分けはどうしてできたか。「いくさする」は「戦ふ」と同じ意味になる。このやうな表現の多様性を考へる、どうも、日本語に入つてゐる語彙は、一つの語源からだけではなく、集團 1、集團 2、集團 3 が交流する中で語彙が豊かになつ

たのではと私は直感する。

そして更に、集團 3 の貢獻として、私が思ふのは、擬音語です。「じゃんじゃん」とか「じゃぶじゃぶ」とか、マレー語にはさういふ反復する擬音語が多い。その影響があつたと思ふ。しかも日常語で、情意、情感ゆたかな表現に多い。繰り返し語もかなり多い。生々しい、すがすがしい等々。日本語として大事な表現だが、明かに集團 3 から來た。

最後に、集團 3 の影響として重要なのは發音です。日本語は、母音系の發音でも、子音系の發音でも、非常に簡單である。母音は「あいうえお」だけで、マレー語もさうだが、萬葉假名で記録された古代の日本語では違つた。今の日本語と同じ發音しなくなつたのは、恐らく集團 3 の人たちが多少母語の發音の違ふ集團の間を往來しながら交流通譯してゐる間に、マレー系の人の發音が影響して發音が簡略化したと私などは想像する。

日本語の表現のもう一つの特徴は、敬語・丁寧語の豊かさです。これはよく言はれますので繰り返しません。結局日本の氏族社會では、非常に歴史的に早い時期に、安定した身分の形が出來上がつてゐたからで、天皇を中心とする社會的の制度、身分と地位が非常に安定してゐて、そこで争ひ事がなかつたからこそ、敬語といふものが發展してき

たと思ふ。それは、神道の祝詞の言葉などにはつきりと残つてをります。

最後に、日本語の文法を五十音圖を使つて整理したものを私共は昔中學校で習つたが、習つた時には、文法つてさういふものかと思つたが、外國語を學んでみますと、あんなに綺麗に整理されてゐる文法をもつ外國語はない。英語なんか、冠詞の a とか the とか、英國人に、the をつけた方がいいのか、a の方がいいのか、どつちだと尋ねますと、一流の學者でも自分で口で言うてみて、the を落していよいよ、と初めて分る。どうしてそれ分かつたんだと訊くと、さう言ふからね、が答へ。理由はない。要するに、ちゃんとした文法は無い。語呂で決めてゐる、フランス語はさうではなく、a とか the とかの使ひ方にきちんとしたルールがあるやうです。しかも英語では、それが變つて來てゐる。私が學生のときに習つたのと、今の英語は違ふ。だから、日本語の文法の活用のやうな整理されたルールは、外國語にはないんぢやないのかと思ふ。

他のウラル・アルタイ語族の言語は知りませんので、比較はできませんが、五十音圖による國語の整理をしたのは、日本人の國語學者の偉大な功績ではないか、と感じます。その五十音圖は、もともと空海が留學した時に現地で梵語

の御經と共にあつたものを持ち歸つたのを基礎に、整理したと言はれてゐる。それを五十音圖に仕上げるまでに、何人かの天才的な學者が貢獻したことが馬淵さんの書物に書かれてゐる。

私が五十音圖の中で、一つ不思議に思ふのは、八行の發音の變化です。歴史的假名遣ひが現代音と違ふのも八行が關係し、八行は濁音も半濁音も關係し、歴史的にもいろいろ變化して來た。これには何らかの理由があると思ふが、「日本語の歴史」を讀んでも、事實の敘述はあるが、變化の理由は判らなかつた。しかし恐らくかうした變化は、日本語の多様な變化の一側面で、過去にも現在も多くの變化があつたし、現にあると思ふ。今は怒濤のごとく、歐米語がカタカナ書で流入してゐる。明治に文語體がやうやく漢文口調から獨立して出來上つたかなといふ所で、口語體の美しい形はまだ出來てゐない今の日本語にとつては、たいへんだと思ふ。以上、だいたい日本語に關しまして、平素からに思つてゐることを申上げて、不十分ながら責を果したことにさせていただきます。

(いちむらしんいち 京都大學名譽教授)

國語國字

参照文献

- 1 樋口隆康「日本人はどこから来たか」
(講談社) 二〇〇七
- 2 古畑種基「血液型の話」
(岩波新書) 一九六二
- 3 市村真一「中国の少数民族(1)(2)(3)」
(山口銀行月報) 二〇〇四年三月〜五月
- 4 中尾佐助
「現代文明の二つの源流…照葉樹林文化と硬葉樹林文化」
(朝日選書) 一九七八
- 5 中尾・上山・佐々木「続照葉樹林文化論」
(中公新書) 一九七六
- 6 大林太良「東アジアの王権神話・日本・朝鮮・琉球」
(弘文堂) 一九八四
- 7 渡部忠世「海上の道新考」
(東アジアへの視点) 一九九九
- 8 山口・鈴木・坂梨「日本語の歴史」
(東大出版会) 二〇〇八
- 9 馬淵和夫「五十音図の話」
(大修館) 一九九三

在

美しい日本語の再発見

大喜多俊一

一

「美しい日本語の再発見」といふのは、實はなかなか大きなテーマであつて容易に解答が見つかるわけではない。以下の論述は、日本語の一つの形を、あるいは表現の一面を、反芻することによつて、それが「美しい日本語」と言へるのかどうかを検討しながら、平素考へてゐることを、少しばかり紹介してみよう。

まづ、「美しい」あるひは「美しい言葉」といふのはどんなことかといふことが問題になる。が、それは結局は、これから述べていかうとすることの全體を通じて明らかになつてくればよいことだと考へて、とりあへずは答へは先送りして、實際に、一般に「美しい」ととらへられる言葉の例を擧げていくことから始めよう。

では、多くの人々はどんな言葉を美しい日本語の例として擧げるのか。まづ考へられるのは單語である。一、三の調査によると(例へば、少し古いが昭和四十年・NHK総合放送文化研究所調査、昭和五十年・朝日新聞調査)、多くの日本人が、美しい、とか、好きだ、とかいふ語にはか

なり共通なものがあるやうに見受けられる。その中で、今私が自分勝手に、美しい、と思はれる好きな言葉を選んでみると、次のやうな語となる。

*故郷ふるさと 父母ちちはは 夢 初戀 かあさん ありがとう

果してこれらの單語は多くの人々に好まれるのかどうか。ところで、單語といふのは、日本人なら日本語の言葉の體系の中に、いつの間にか組み入れられ、しまひこまれてゐる状態になつてゐる音であり、文字である。それは五感といふ立派な筆筒に幾つもの引き出しがあつて、ある程度整理されてしまひこまれてゐる状態であるといつてよい。人によつて、筆筒の大小、引き出しの多い少ないはあるが、だれもが知らず知らずのうちに共通の音や文字をそこにしまひこんでゐるものである。世に蘊蓄の筆筒といつて、ずいぶん立派で有益な語句が蓄へられてゐる筆筒もある。

ところが、そのしまひこんでゐる状態では、それは美しいとははつきりとは氣づかれないし、それがいきいきと示されないことには、好きだとはすぐには言へないから、しまひこまれた状態を生かす形に引き出す必要がある。靜かな状態で待機してゐる音や文字を、躍如として使ふことが必要になる。これは表現、あるいは時には表出といふ行爲であり、目に見え、耳に達する行動である。その時に初め

て、その音や文字が大方美しい姿になつて現れるといつてよい。これが言葉であつて、ここに、この言葉は美しい、日本語のこの表現は美しい、などといふことが認識される。そんな發想で、これから、美しいと思はれる言葉について見ていくことにする。

二

では、その表現はどんな形になつて登場するか。一つは短い形では、短歌・俳句・詩などの詩歌の姿になる場合であ、今一つは、會話となつて對人關係の中で交はされる場合である。つまりはまづ短い文として表されるといふことである。

では、第一例の「故郷」といふ語はどんなふうにかき立てあるのか、言葉として發せられた形を見てみる。初めに、明治時代に活躍した石川啄木の短歌を引用する。

*ふるさとの山に向ひて／言ふことなし／

ふるさとの山はありがたきかな

*ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／

そを聴きにゆく

これら二首はともに人口に膾炙した有名な短歌である。

前者は故郷の山への思ひを率直に表出したものであり、後者は温かな、人と入との關はりを漂はせる歌で、共に共感

を呼ぶ作品である。啄木にとつての山は故郷の岩木山と姫神山で、それは自分を包みこんでくれるイメージのままであり、後の歌の停車場は東京の上野驛で、ここで故郷の訛を聞いて懐かしさで胸が一杯になる。これにつづいて更に、

*かにかくに澁民村は懸しかり／
おもひでの山／おもひでの川

でもよくわかるやうに、これらはいづれも故郷思慕の凝縮された表現がなされてをり、言葉が生きて使はれてゐると言へるのではないかと考へるところである。

東北地方といふのは、詩人の故郷、ひいては文學者の多い地方であり、宮澤賢治・高村光太郎・太宰治などが特に有名であるが、「故郷」に思ひを寄せた今一つの例として、光太郎の詩を擧げてみる。

*ここはあなたのふるさと、

このふしぎな別箇の肉身を生んだ天地。

まだ松風がふいてゐます。

もう一度この冬のはじめの

物寂しいパノラマを教へてください。

あれが阿多多羅山

あの光るのが阿武隈川。

これは光太郎が智恵子夫人と最も幸せな日々を過ごしてゐた時の作品で、愛する妻とその妻の故郷に寄せる作者の思ひがよく傳はつてくる美しい詩である。人の愛と故郷とのつながりがしみじみと感じられるところで、「ふるさと」の語がよく生かされてゐると言はれやう。「智恵子抄」の中の「樹下の二人」といふ題の詩の一節である。

次に「父母」という語が使はれてゐる場合を擧げてみる。「かあさん」といふ語についても同様に考へてみる。

どんな人にとつても「父母」といふのは最も身近な存在であるだけに、父母にまつはる思ひといふのは深く豊かにあるもので、それは古來から變はるものでなく、萬葉集に次のやうな歌が見られる。

*父母が頭搔き撫で幸くあれと言ひし言葉ぜ忘れかねつる
これは北九州一帯の防備のために遣はされることになつた農民兵士が、出發の折の光景を思ひ出して歌つてゐるもので、巻二十にある、防人丈部稻麻呂の歌である。父母との別れのつらさがひしひしと傳はつてくる、その聲が聞かれやうといふものである。

それから時代が一氣に下つて、明治の世にこんな歌が歌はれてゐる。

*海戀し潮の遠鳴りかぞへてはをとめとなりし父母の家
これは與謝野晶子の作品である。作者が戀しがつてゐるのは海だけではなく、戀のために父母も家も捨てて出た乙女の日の悔恨と反省と懐かしさが傳はつてくる情緒あふれる一首である。彼女は父と母をこそほんたうに戀しく思つてゐたのである。

また、『昭和萬葉集』にこんな歌がある。

*學びつついづれも若く貧しくて父と母とが相知りし日よ
*亡き母の登りゆく背の寂しさや杖突峠霧にかかりて
三國玲子
阿部正路

このような父母を偲ぶ詩歌を擧げるといささか悄然とした氣持ちになりやすいものである。が、平成十六年二月に行はれたその年の「歌會始の儀」には、母の思ひ出を詠んだ次の歌が入選作として披露された。毎年「歌會始」に寄せられる多くの作品に大變動を覺える中で、ここに紹介する歌もまた心打つ秀作の一つであると思はれる。御題「幸」に因んで詠まれた歌は、

*夢に來ていま幸せかと問ひ給ふ母の若さの眩しかりけり
岡部すず子
といふものであつた。作者は、その時七十歳、その母は

五十二年前に亡くなつてをられるとのことであつたから、十八歳の時に他界された方が夢の中に現れて、自分よりも年上の子を心配してくれるといふもので、作者は母への感謝に満たされて、その美しかつた姿を「眩しかりけり」と歌つた、美しい親子が美しい日本語を駆使されてゐるものである。親子の氣持ちを表すと云へば次のやうな歌も擧げておきたい。

*父をよぶ聲も聞こえず母をよぶ聲も聞こえず秋の日暮るる
 金田たか

生前相まみえることなく幼くして逝つた二子の墓前にたらずんで詠んだ母親の長嘆の一首である。作者は『グリム童話集』の翻譯者金田鬼一氏の妻である。

以上のやうに、父母は短歌にしばしば歌はれる一方、次のやうな別の短い表現によつても語られる對象になる。古川柳の中の有名な一句を引く。

*母の名は親仁の腕にしなびて居まゐ

人の世の風情を詠んだペーソス一杯のおもしろみ、情感豊かに残された文身（入れ墨）のことをみごとに言ひ表した作品である。『俳風柳多留』（柄井川柳選）に載つてゐるもので、日本語のユーモアそのものである。また、川柳について、俳句の「母の日」「父の日」に關して、それぞれ

一句づつを擧げておく。

*母の日やそのありし日の裁ち鋏

菅 裸馬

*老いてなほ働かねばと父の日あり

小林康治

また一方では唱歌として有名な「かあさんの歌」や「里の秋」がある。前者は母親への愛情を反芻する歌であり、後者はひたすら父親の無事を母とともに祈る言葉が印象に残る懐かしい詩である。

次に「夢」である。平成十五年、プロ野球セントラル・リーグで、阪神タイガースを十八年ぶりに優勝に導いた星野仙一監督執筆の一書は『夢』といふ題であつた。これは一字で行つた一つの表現行爲であり、一つの作品である。チームの夢、關西ファン渴望の夢、それを實現せんとして努力した主人公は、今なほ夢を持ちつづけてゐる青年の趣であり、希望を託されてゐる人物である。先に引いた短歌の中にも「夢」といふ語が見られたが、その語のもつ意味は、使はれる箇所によつてまた異なつた響きとして感じられると言へるやうでもある。さらにまた一方、夢は残念ながら潰え去るものでもあることをも表すもので、松尾芭蕉の『奥の細道』にある一句、

*夏草や兵どもが夢の跡

は、夢の推移を靜かに詠んだ一句で、その隨筆作品全體を

見ても最も印象深い情趣をたたへ、「夢」といふ語が筆筈にしまひこんであるだけではその感動を呼び起こすことができないことを如實に表す適切な例であると思はれる。句の前後の件りを讀めば、句の中で「夢」の語が生きてゐることがよくわかるといふものである。

ところで、「故郷」「父母」「夢」といふ語を連ねてくると、ここでのこの三つの語を併せ持つてゐる有名な、懐かしい唱歌が想起される。かの「兎追ひしかの山、…」で始まる文部省唱歌の『故郷』である。高野辰之作詞、岡野貞一作曲で、大正三年の作ながら、今もこの歌を愛好してゐる人は多く、同じ年に作られた『朧月夜』と雙壁をなすと言はれてゐる。

これも作詞者・作曲者は同じで、歌詞全體が優しい大和言葉で綴られてゐるといふ特色を持つてをり、これぞ美しい日本語の好例ではないかと稱へるところである。曲を口ずさみながら、全歌詞を書き寫して復習してみれば、そのことがよく理解できる。

次に、今一つ、「初戀」といふ語について語つておきたい。古典的香りのするこの語からは、だれもが經驗する甘酸っぱい想ひ出が蘇り、忘れることのできない切ない思ひが身に染みるが、わけても、昭和初期に喧傳された「初戀の味がするカルピス」といふ廣告コピーが効果的な宣傳文と

してその價値を發揮したことが思ひ出される。コピー自體が美しい日本語と言へるのではないかと考へるところである。初戀については多くを語りたところながら、感情をこめた冗長な話は避け、ここでは島崎藤村の詩『初戀』を掲げてその思ひを代表させることにしたい。

*まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
薄紅の秋の實の
林檎をわれに與へしは
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき戀の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ
(おほきたしゆんいち 元・京都市教育委員會課長)

【本稿は、平成十六年二月十四日、京都府宇治市産業會館における、一般人、教員、道徳科學研究會會員を對象とした、教育講演會の論旨に基づくものである。】

縦書きの意識と感覚（その三）

若井 勳夫

雨の降り方

「一遍上人繪傳（二遍聖繪）」巻五に、下野國小野寺で驟雨に遭ひ、「雨宿りする場面がある。人物の進行は絵巻物の定石通り右から左への方向だが、雨脚は渴筆によつて左から右へ何本も走つてゐる。この左からの方向は既述の通り、異常な力の發現、また、「法然上人行狀繪圖」の阿彌陀三尊の來迎のやうに、淨土への救濟を示す。

廣重の「東海道五十三次」で、雨の場面は三景ある。大磯の虎ヶ雨は左から、庄野の白雨は右から、土山の春之雨は眞直ぐと描き分けられてゐる。庄野では坂道を前屈みに右から登る人々に追打ちをかけるやうに、雨は右から降りつけてゐる。左からでなくても、坂登りによつて力強い緊迫感は十分にある。一方、廣重・英泉合作の「木曾街道六十九次」では、右からの雨が杳掛の驛（平塚原雨中之景）と須原、眞直ぐなのが中津川、三方からが垂井で、左からの雨がないのが注目される。

以上から、雨脚の描き方はいろいろである。「都名所圖繪」に倣つた竹村俊則の「新撰京都名所圖繪」全六巻（昭

和四十年）を調べると、雨の風景は小町寺、式子内親王塚をはじめ六點あり、雨脚はすべて右上から左下へ落ちてゐる。これらは人物の動きはなく、静止してゐるが、人物の點描、街の様子も描かれる。右を改訂した「昭和京都名所圖繪」全七巻（平成元年）は生活の場面がなく建物を中心で、雨の風景は松原橋の一點のみで、前者と同じ繪がある。この書の右からの雨の降り方を見てみると、ごく自然な安定感と調和を覚える。これがもし左上から右下への降り方であれば、印象が變つて、地面をたたきつけ、道行く人に立ち向ふ感じを與へるであらう。現實の雨の降り方は多様であるが、繪に描く時には繪巻物や縦書きの方向と同じく、右から左へと動いていく。これが日本人にとつて自然な方向感覚といへるのである。

建物の構図

竹村俊則の圖繪には社寺の鳥瞰圖が多く収められてゐる。この描き方に二種類あり、一つは斜め左下から右上の方向へ俯瞰した圖で、讀者は右上から左下への繪の流れとして降りても見ることが出来る。もう一つは、斜め右下から左上の方向へ俯瞰し、讀者もその方向に上つて見るが、その逆はないだらう。つまり、右から左への流れが自然な

のである。この二つの構圖は建物の背景や土地の廣がり、全體の風景によつて適した描き方がされてゐるだらうが、今、そのことを考慮せず、「昭和京都名所圖繪」で統計すると、前者は一四五點で五十七%、後者は一一〇點で四十三%であつた。後者はなぜか洛西、南山城と南部に行くほど増えていく。

以上の結果の分析は輕々しく言へないが、大體の傾向として右から左への方向、つまり前方が左側に開いてゐる風景が多く、自然な安定感があり、既述の北齋の描き方と同じ發想と言へる。前者は正門に至る道、建物の配置など典型的な描き方で把握しやすいが、後者は一瞬に全体像を把握するのがやや難しい感じを受ける。これは人物や電車、飛行機が左方向へ進む感覺と根底で繋つてゐると言へよう。

巡禮の方向

四國八十八ヶ所の遍路道が徳島縣を起點に右廻り（時計廻り）で高知、愛媛、香川縣へと巡禮することは既述した。この順打ちは坂東三十三觀音靈場で鎌倉市から埼玉、神奈川県を経て關東から千葉縣へ、秩父三十四觀音靈場が秩父市から郡内の町村を巡禮する順序にも言へる。西國三十三ヶ所はすべてが右廻りではないが、一部の地域で、和歌山・

大阪・奈良へ、京都西部から大阪・兵庫・滋賀へと、やはり時計廻りである。比叡山の千日回峰行は東塔から出發して西塔を経て横川へと巡拜し、峰を右廻りに廻つてゐる（「暮らしのなかの左右学」）。

佛教の進退

「一遍上人繪傳」卷四で、信濃國小田切の里で初めて踊り念佛が行はれた。この繪をよく見ると、確かに右に廻つてゐる。「一遍上人繪詞傳」卷二で、佐久の野澤領主の屋敷での踊り念佛も同じである。時宗總本山清淨光寺の本堂で毎年九月十五日に薄念佛會が行はれ、内陣の周圍を右に廻りながら念佛を唱へる。佛教において廻轉運動（行動・ぎやうだう）は基本的に時計廻りで、これは佛に對して右肩を向ける古代インドの禮法に基づく。佛教では右優位で、右巡、右進左退といひ、古代寺院は南面して南が正面で、東から始めて、南、西、北の順で巡禮する。この傳統が札所巡りに生き續け、双六の遊びにも引き繼がれてゐるのである。

沖繩の東御廻り

沖繩の知念半島に琉球王國の最高の聖地である齋場御獄

(せーふあうたき) が今に残る。國王や聞得大君(きこえおほぎみ、最高神女)の聖地巡拝の行事がこゝで行はれた。首里城を中心に、大里、佐敷を経て、知念、玉城(たまぐすく)の拜所を巡り、この知念から玉城の巡拝を東御廻り(あがりうまい)と稱した。この巡り方は佛教の巡禮と同じ方向で、東から西への進みである。大東島はうふあがり(うふは大きい意)、おほあがりで太陽の上るところ、西表島はいりおもてで、いりは太陽の入る、おもては正面の意で、日没の正面のことである。東御廻りは太陽の動く方向と一致する。日の出、日の入りに従つて、國王や聞得大君が進んで行くのである。この方向觀念こそ日本人にとつて基盤をなし、同時に、縦書きの自然な感覺と根底で結びついてゐるのである。

右から左への進み方

船を展示する場合、舳先を左右のどちらに置くのが前に進み行く感じを與へるであらうか。飛行機や電車と同じく、左側が前方であり、前進していく。これが逆であれば、不自然で難航する印象になる。また、船の運行の安全を祈願して、奉納される船繪馬は日本海海岸の社寺に多く見られ、帆は風を受けて左に膨らんで、左方向へと進む。これは前

稿に述べたやうに左向きの馬の繪馬で祈りを込めるのと同じ感覺である。

日本人は右から左への方向に安定感、安心感を感じる。馬に乗つた武者姿は左を向き、駆けて行く。兜を飾る時は、右から左方向に、やや正面を前に向けて置くのが自然で美しい。熊に乗つた金太郎や鬼征伐に出陣する桃太郎は左へと進む。風にひらめく旗は船の進みと同じく、左の方向にはためいてゐる。

貨幣の文字は古來どのやうに表してきたか。和銅元年(七〇八)にわが國最初の錢、和銅開珎(寶、宝)がつくられた。眞上に和、續いて時計回りに右に同、眞下に開、左に珎と記される。これは後世の双六と同じく縦書きである。その後の皇朝十二錢はすべてこの書式である。桃山時代には天正通寶が上から下(北から南)へ天、正と配し、右から左(東から西)へ通、寶と配するのになつた。時計回りから上下の縦線と右左の横線が交叉するやうになつた。この右から左は横書きではなく、一文字が一行の縦書きである。

江戸時代の寛永三年(一六二六)に始つた寛永通寶も同じ書式で、これが定式となつた。天保六年(一八三五)からの天保通寶は小判型になり、縦書きで天保、四角の穴に

續いて、通寶と書く。この作法は明治時代に入つても受繼がれ、漢數字による縦一行と右横書きが併用された（左横書きや算用數字に改められたのは戦後のことである）。

なほ、この貨幣の型に做つた例に、京都の龍安寺のつくばひ（手水鉢）の文字がある。吾唯知足（われただたるをしる）の四文字に口の漢字要素が含まれてゐる。この口を貨幣のやうに真中に四角い穴をあけ、眞上から時計回りに口を省いた漢字要素を浮彫りにする。一種の文字遊びであり、縦書きの傳統を正しく傳へてゐる。

——正字・正かな運動實踐のために——（二）

文化傳承としての古典尊重と假名遣論

市川 浩

國語問題協議會は昭和三十四年の設立であるから、本年はすでに半世紀を越えること三年、一貫して正字・正かなの復活を標榜してきたが、言論界の世代交代により、昭和二十年代から四十年代頃までは健在であつた、「現代かなづかい」を拒否する「頑冥な保守主義者」が退場して、正字・正かなを目にすることも皆無に近くなり、また前稿に述べた如く、最近では古典の現代假名遣表記さへもが提唱されるに至つてゐる。かうした最近の客觀情勢を考へると、一種の戰術轉換を迫られてゐるやうに思はれる。（——正字・正かな運動實踐のために——（一）國語國字第百九十三號）

轉換の主眼は運動の目的を文化傳承としての古典尊重の原點に置くことである。意味の明確化でもある。我々が傳承すべき國語の傳統とは何か。繩文時代後半に成立して水田稻作を弘めて以來の話言葉と、五世紀初頭の漢字傳來

以來の書き言葉といふ、長い歴史の中で先人が傳承し、發展させた文化としての國語でなければならぬ。この内後者は儘かに西洋言語學の定義通り「話し言葉の記録用」として出發したが、奈良時代以降それまでの上代特殊假名遣に代表せられる強い表音性から、次第に現在の五十文字への包攝により、發音からの獨立性を高め、平安中期以降のハ行轉呼に對する書法追隨を拒否した藤原定家により、假名遣として完全な獨立を確立し、これが契沖、宣長を歴て今日完成したといふ歴史を背負つてゐる。特に現在の「口語體」は「文語體」の本質を正確に受継ぎ、明治大正時代の文學者の努力により成立した「書き言葉」である。この長い歴史を有する言語文化を次世代に傳承することが我々の責務である。

一般に文化の傳承には其の文化を有する共同體の成員個人個人が次世代に對して傳へ、次世代はこれを「學習」して受け繼ぐことが要請される。例へば最近のテレビで、ライメンヲ啜る擬音語（オノマトペ）として壓倒的多數の人が「ズルズル」を聯想すると報じてゐた。「ズルズル」は洩（はなづ）の流れであり、また問題解決の先延しであつたりと餘り良いイメージはなく、食事の擬音語としては寧ろ「不味さうに

啜る」を意味する。このやうな「感性」は父母や先輩の指導がなければ育たない。この一事からも明らかなく、今日の國語問題は國民各人が次世代への言語文化の傳承に無關心であることに盡きるのではないか。

従つて假令義務教育に於て其の教育がなされずとも、日本人一人一人が子供に古典を讀み聞かせ、それを通して國語の感性を育て、延いて文語や歴史的假名遣にも親しませ、學習させる必要がある。さうしてこのことは今後の正字・正かな運動を考へる上で重要な轉換の必要性を示唆してゐる。

我々は「現代假名遣い」を元膚無きまでに批判し得るが、當局者は一切反論せず只管既成事實の積上げに邁進して來た。昭和六十一年の「現代假名遣い」には折角個々人の表記にまで及ぼさうとするものではなく、一方歴史的假名遣を尊重すべきと明文化されたにも拘らず、言論界特に有力な言論人は見向きもせず、正字・正かな運動は急速に失速した。

結局昭和五十年代「國語破壊を止める」運動の高まりの中で、「現代假名遣い」制定をめぐり、これを「強制と感ぜる被害妄想患者に必要以上の配慮」して、前書を「八箇

條にも膨れ上げさせて、免に角廢止から守り切つたことがその後の「現代仮名遣い」の勝利に繋がつたと言はざるを得ないのである。(引用は白石良夫「かなづかい入門」平凡社新書百六十五頁)

このやうな経緯を見れば、「現代仮名遣い」批判は一定の成果を収めたとはいへ、今日なほこれに拘泥するのは必ずしも得策ではないと思はれる。文化傳承の立場からも、我々は「現代仮名遣い」が不合理だから、或いは歴史的假名遣が合理的だからといふ選擇に走るべきではない。

同様のことは古典そのものに對しても認識を明確にする必要がある。今日「古典文化尊重論」に名を藉りた「原典尊重主義」が、我々に對して寧ろ批判的な勢力により聲高に主張せられ、例へば、寫本校訂に於ける歴史的假名遣依據を否定し、或いは漱石や藤村の手書き原稿にある表現や表記の誤りをその儘全集に印刷する傾向にあるなど「原典尊重」を逆手に取つた國語破壊が進行してゐる。我々が尊重する古典とは、前代のものでは、假令原本が失はれてゐても、寫本を先人が校勘して定本としたもの、或いは近代の作品に於ても、印刷時のゲラ刷校正を経たもの、即ち文化的に處理、傳承せられて來たものでなければならぬ。

以上述べて來た戰術轉換の具體化に當つては、正字・正かな運動を言語文化の傳承運動と捉へ、博く全國民の理解と協力を求める爲の活動として、子供への古典讀み聞かせ支援、明治大正文學の正字・正かな再版の促進、高校での國語の歴史を概説する副讀本の制作などが考へられる。

一方このやうな戰術の轉換には一見「理論的脆弱さ」を孕んでゐるかに見える。「現代仮名遣い」批判に走らないのは、歴史的假名遣の内包する矛盾を覆ひ隠してゐるのではないか、或いは寫本の校訂に歴史的假名遣を無條件適用すると意味を誤解する恐れがあるなどの批判が目につぶ。我々がこれらの批判に對して謙虛に反省しつゝも、なほ歴史的假名遣を主張する所以は、それが文化として成立し、傳承發展して來たものへの愛に外ならないからである。そしてそれは、恰も親や國に對すると同じく、選擇不能の對象への愛であり、當に「大慈大悲」の「かなしみ」を意味してゐる。

(いちかはひろし 申申閣代表、國語問題協議會)

【本稿は平成二十四年四月十九日、西東京市柳澤公民館に於ける非營利活動法人東京雜學大學に於て行つた講演内容を基に、加除したものである。】

「假名遣存立の基礎」とは何か

上田博和

橋本進吉は晩年の論文「表音的假名遣は假名遣にあらず」で、〈假名遣〉の本質は「同音の假名の語による使ひ分け」であり、〈表音的假名遣〉は「同音の假名」を認めないから〈假名遣〉の解消を意圖するものだと論じた。

假名遣といふ語は、中略・「い」と「ぬ」と「ひ」、「え」と「系」と「へ」、「お」と「を」と「ほ」、「わ」と「は」のやうな同音の假名の用法に關してのみ用ゐられてゐる。

(第一章冒頭)

假名遣は最初から同音の假名のつかひわけといふ問題がその本質をなしてゐるのであり、従つて之を定める基準としては語によらざるを得なかつたのである。中略・假名遣に於ては、違つた假名は、それぞれ違つた用途があるべきものとし、たとひ同音であつても別の假名は區別して用ゐるべきものとするに對して、表音的假名遣に於ては假名は正しく言語の音に一致すべきものとし、同音に對して一つ以上の假名の存在を許さないのである。もし同音の假名の存在を許さなければ、假名遣はその存立の基礎を失ひ雲散霧消する

外ない。即ち、表音的假名遣は畢竟假名遣の解消を意圖するものといふべきである。然るに之を假名遣と稱するのは、徒に人を迷はせ、假名遣に對する正當なる理解を妨げるものである。

(第五章末尾)

橋本論文の第一章中程と末尾・第五章冒頭・第六章冒頭によれば、〈假名遣〉は「語を假名で書く場合のきまり」「假名による語の書き方」「語を寫すもの」であるが、これは〈表音的假名遣〉が「音を假名で書く場合のきまり」「假名による音の書き方」「音を寫すもの」であるのに對して、さう述べたにすぎない。これらは〈假名遣〉の本質規定ではないのだが、『橋本進吉博士著作集第三冊』の解説(大野晋)には、假名遣の本質は「伊呂波の假名を用ゐて語を(音にあらず)如何に書くべきかといふ問題」であり「それを最も力こめて述べられたのが」この論文だと書いてある。

福田恆存が『私の國語教室』に引用したのも多くは「語を假名で書く場合のきまり」といふやうな假名遣解説であり、前掲第五章末尾からは「假名遣存立の基礎」のところだけを引用してゐる。具體的に見てみよう。

橋本博士の非難する當時の「表音的假名遣」は、すなはち今日の「現代かなづかい」であります。博士によれば、それはもはや假名遣とは稱しがたいもの

であり、それによつて「假名遣はその存立の基礎を失ひ雲散霧消する外ない」ものなのです。そこで「表音的假名遣は假名遣にあらず」といふ結論が出てくるわけです。

(文春文庫版57・58頁)

〈假名遣〉とは稱しがたい〈表音的假名遣〉によつて「假名遣はその存立の基礎を失ひ雲散霧消する」とはどういふことか。「假名遣＝語を假名で書く場合のきまり」説では、その意味を理解するのは難しい。「もし同音の假名の存在を許さないとすれば、假名遣はその存立の基礎を失ひ雲散霧消する外ない」のは、〈假名遣〉が「同音の假名の使ひ分け」であり、「同音の假名」が「假名遣存立の基礎」だからである。

「戀」をかなで書くと、「こひ」「こい」「こゐ」のどれを正しいとするか、「通る」は「とほる」「とおる」「とをる」「とうる」のどれを正しいとするか、あるいはまたどれでもいいとするか、當然さういふ問題が起つてまゐります。もちろん、讀めさへすれば、どれでもいいのなら、橋本博士の述べてゐるやうに「假名遣はその存立の基礎を失ひ雲散霧消する外ない」でせう。

(文春文庫版61頁)

「讀めさへすれば、どれでもいい」とは、「ひ・い・ゐ」「ほ・

お・を・う」などの同音假名の存在は認めるのだから、「假名遣存立の基礎」は失はれないはずである。

〈假名遣〉を「語を假名で書く場合のきまり」と定義するのは、その対象を同音假名から別音假名をも含んだ假名文字全體へと廣げることである。別音假名には表音主義が通用するから、この定義は〈表音的假名遣〉を否定したつもりで、實は〈表音的假名遣〉を容認するものである。

現に、現代の〈表音的假名遣〉たる「現代假名遣い」は假名文字全體を〈假名遣〉の対象とし、「同音の假名を語によつて使い分けること」から「仮名によつて語を表記するときのきまり」へと〈假名遣〉の定義を改變したことを答申前文に明記した。従來の定義では表音主義を原則とすることができないが、新しい定義ではそれができるからである。

追記 橋本進吉「表音的假名遣は假名遣にあらず」は『國語と國文學』昭和十七年十月號に發表されてすぐに、日本國語會編『國語の尊嚴第一輯』（昭和十八年五月刊）に「假名遣の本質」と改題して轉載され、歿後に『橋本進吉博士著作集第三冊』文字及び假名遣の研究（昭和二十四年十一月刊）に収録された。『國語國字教育史料總覽』（昭和四十四年一月刊）もこれを收める。

〔本會理事〕

見立てを誤つた文部科學省の證據改竄

上西俊雄

大阪地檢特搜部の事件以來、見立てをもつて捜査がなされるのが間違ひだとする人が多いやうに思はれる。しかし、見立てに合ふやうに證據を探していくといふのは當たり前のことだ。ただ、見立てに合はない證據が一つでもあれば、見立てを修正する柔軟性がなければならぬ。我々は常に或る見立てで物事をみていく。そして小さな證據に氣がつかないか氣がついても踏みにちつてしまふ人は多い。

最近、面白い例をみつけた。露伴の『眞言祕密 聖天様』（明治二十四年）で其の名も葦沼濕といふいやらしい人物、少し飲んでの歸るさ、人力車夫に聲をかけられてみれば零落はてた舊主、合力はおろか乗るのもいやだと、ついに舊主の臍を蹴飛ばして歸つた其翌々日の出來ごと。

「濕が官衙に出たる留守へ、ごめ、ん、な、さ、れ、と細く寛める調子で」と、言葉の調子まで表さうとした表

記で始まる。

見るから幽靈らしきが然も座敷へ竹の杖ついたまゝ、泥足で踵と上つて来て、とても厭な世の中を今晚は退きまする駒下駄の御役介には既かゝりませぬ、と是だけ御傳へ下され、臍折れが參つたと仰やれば旦那様には宜く御分りになります、左様ならば、と又ひよる歩ながら、ア、奇麗な極樂のやうに結構な御座敷と、變な獨語變な笑ひやうして沓脱へ下りかゝり、何した拍子かどたりと轉んで戸道に膝をつき、ゑあツ痛いは、いつそ此所に鎌でもあれば好いに、と寝たまゝ云ふて頓て徐々去りし跡、下婢も女房も茫然となりて、今日は寒いとばかり小さくなつてかたまりぬ。

ここにある「ゑあツ」の「ゑ」は如何なる音を表してゐるのか。露伴は音についても随分深く考へた人だ。私の主導する擴張ヘボン式ではワ行子音と語中のハ行子音とを離合の徵表とみる。つまり、ここは鋭く始まつたエだと思ふのだ。ウエでは逆になつてしまふ。

戦後の國語政策で辣腕を振つた保科孝一の一統は國語音韻は變化してきたと看る。當然ながらこれからも變化しつ

づけると看る。假名字母四十七文字は假名成立時の音韻に對應したもの。明治期には區別のなくなつたものがあるとして、ワ行のイ段エ段オ段、語中のハ行假名を不要とし、ヂジ、ヅズも一方だけでよいとした。當時のローマ字を金科玉條としたところがある。

萬葉假名と假名の成立時の表記とは上代特殊假名遣と呼ばれる八母音體系から五母音體系になつたといふことと、清濁が共通の字母で書かれるやうになつたといふことの違ひがある。國語學では後段の清濁が共通の字母で表すことになつたことは無視する。また八母音體系から五母音體系に變るほどの如何なる大事件があつたかといふことも無視する。

上代の表記は渡來人によつてなされたとされる。朝鮮語は八母音體系、音韻が變化したのでなく、認識が進んだのだといふ説がでてきたのも當然だと思ふ。その響に倣つて言へば、渡來人が濁音と清音とを別々のものと捉へたのは當然であつたはずで、假名の成立時に清濁を同一の字母で捉へる認識にすんだとするのは、言語學でいふエティック（音聲學の見方、外からみるので當該言語では意識され

ないやうな區別を持ち込む）よりイミミック（音韻論的見方、母語話者の見方）へといふ流れにも叶ふ見方だ。

つまり、上代と假名の成立時の間に音韻變化があつたとする證據はそれほど強固なものではない。だから江戸時代の國學で、假名遣が問題になれば、時代を遡つて調べるといふのは當然とされたのだらう。時代を遡つて調べる方法であれば、これが正しい書き方といふのが定まる。所謂現代假名遣では制限假名字母を使ふかどうかだけが問題で、どうつづるかは音韻次第だから定まることがない。假名遣といふものがあるとすれば、それは歴史的なものでしかあり得ないのだ。

よく考へてみて欲しい。筆で書くとき、字の相對的大小で二字組合せて一つの子音とし、三字めの假名で母音を與へ、都合三文字で一つの音節を表すことが可能だつたはずがない。そのやうな音がなかつとは言へない。しかし、そのための假名を作り出すことはなく、二文字の組合せで表したのがイロハ歌のケフであつたのではないか。これは文盲のための般若心經でミヨウと假名書のあるところを眼の繪と鵜の繪、つまりメウとあることによつて知られるところである。

以上、巖がイハホとなつてゐたことから、語中のハ行子音の結合力を思ふのは見立てを修正することで、強引にイワオとするのは見立てに合せての改竄だといふ説明を試みた。

ワ行子音や語中のハ行子音を離合の徴表として、歴史的假名遣を飜字式ローマ字で轉寫してみればきはめて読みやすい綴りが得られる。これは我ながら意外な結果であつた。傳統のこと、ローマ字のこと、一見相反する問題が一舉に解決するのだ。手術は一刻も早い方がよい。

(かみにしとしを 擴張へボン式提唱者、本會評議員)

【メルマガ「頂門の一針」(平成二十四年四月三日)に書いたこと約。】

國語大變、弓爾遠波がゆらいでゐる

上西俊雄

完全に發音通りといふ方式(さういふことが可能であるかどうかは別問題)をほんの一時いつときながら體驗した世代は我々だけかもしれない。しかし、すぐに弓爾遠波(テニヲハの萬葉假名、假名の書き方の問題だから假名で書くわけにいかない)に關しては傳統的假名遣の使用が解禁になつた。

昭和二十一年内閣訓令第八號に「たゞし」とあるところがさうだ。

(イ)ゐ、ゑ、をはい、え、おと書く。たゞし助詞のをを除く。

(ロ)ワに發音されるはは、わと書く。たゞし助詞のはは、はと書くことを本則とする。

(ハ)エに發音されるへは、えと書く。たゞし助詞のへは、へと書くことを本則とする。

(ニ)二語連合によつて生じたぢ、づは、ぢ、つと書く。

(ホ)同音の連呼によつて生じたち、づは、ぢ、つと書く。

それから四十年、昭和六十一年の内閣告示第一號では「特定の語については、表記の慣習を尊重して、次のやうに書

く」とあつて

(ハ) 助詞の「を」は、「を」と書く。

(ト) 助詞の「は」は、「は」と書く。

(チ) 助詞の「へ」は、「へ」と書く。

と書いてある。本則といふより強い書き方だ。

しかし、これが顔面通りに通用しないといふのだ。國際基督教大學圖書館の黒澤公人氏が本屋に設置してある圖書検索システムについて教へてくれた。タッチパネル方式による検索。タッチパネルに表示されるカナの表のことを五十音圖と呼ぶ人があるが、五十音圖と呼ぶには行と段が通つてない上に、ワ行のイ段やエ段、すなはち半もエも脱落してゐる。だから五十音圖とは呼ばずにカナの表と呼ぶより無い。

* 「吾輩は猫である」なら「ワガハイハネコデアル」と入力するのでなく「ワガハイワネコデアル」とするさうだ。

黒澤氏よりメールの届いた翌日友人と五反田驛の書店を試してみた。まつ「ワガハイハ」と入力して検索したところ、ちやんと漢字カナ交じりの通常の表記で結果が表示される。次に「ワガハイハネコデアル」と入力して全文一致といふボタンを押してみた。三件のヒットがあつた。どうも可笑しい。念のため「ワガハイワネコデアル」と敗戦直

後に教はつた方式で入力してみると十六件のヒット。なるほど確かに學校で教へてゐるいはゆる現代假名遣の方式は五分の一の價値しかない。

翌々日、新宿の書店でいくつか試してみた。

* 「いづこへ」、これは、カタカナの書名がある筈なのだけれどヒットなし。イツコエでもヒットなし。イズコエでヒット十件。調布の圖書館で「いづこへ」を検索すると坂口安吾だけではなく、「何處」と漢字表記のものから「いづこ」となつてゐるものまで二十一件ヒットする。曖昧検索といふ方式。一杯出てくるからよいだらうといはれても困る。検索するときはずばは精確に出して欲しい。味噌も糞も一緒では困る。

書店のシステムを試すべく何度もイツコへを入力したら書面に注意が出て曰く、「ハ」は「ワ」、「ヲ」は「オ」と發音通り入力しましたか。

徒然草を忘れてゐた。最寄りの書店で試した。二語連合のところ「つれづれ」の例があるので、所謂現代假名遣でもツレヅレの筈。ヒット三十一件。ツレヅレグサではヒット三百七十六件。

以上、三軒の書店で試した結果である。それぞれ書面設計など違ひがあるものと同じデータベースを利用してゐ

ると思はれる。

I Tでこんなにヒット率が悪い表記を教へてゐるわけだ。昨年、常用漢字表で「中」にジュウといふ読みを認めた理由がはつきりした。假名字母の制限を段々と厳しくしていくつもりなのだ。所謂文部科省の狙ひとする現代假名遣はまだ未完成的なのだ。

敗戦時の國語政策は傳統を斷つといふ過去との關係の問題としてだけでなく、將來へむけての問題であることを訴へたい。



臺灣歌壇について

蔡 焜燦

萬葉の流れこの地に留めむと

生命いのちのかぎり短歌うた詠みゆかむ

孤蓬萬里（『臺灣萬葉集』）

この和歌の作者の氏名を見ずに和歌だけを讀んだ讀者は、ほとんどが「ああ、この歌は外國の人が外國で詠んだ歌だなあ」と思ふに違ひない。

今、日本以外で三十一文字の和歌を日本語で詠む國はいくつあるだらうか。ブラジル、臺灣、韓國……。ポーランドでは大學の日本語學部で詠んでゐるさうで、フランスには日本の先生方によるフランス語譯の名作があり、アフリカの人々の心を打つやうな作品を、臺灣の歌人達も感動して拜讀したことがある。

さう、冒頭の歌は臺灣の「臺灣歌壇」の創始者、孤蓬萬里こと吳建堂氏の詠まれた歌だ。

吳氏は戦前、臺北の舊制臺北高等學校理乙に在學中、『萬葉集』に魅せられて醫學と文學の二足わらし（吳氏自稱）を履いて半世紀を過ごされた方である。吳氏の經歷を簡單

に述べると、一九二六年（大正十五年）臺北生れ、臺北帝大醫學部卒、熊本大學醫學部博士、劍道八段、第三回世界劍道選手権個人三位（一九七六年）、『臺灣萬葉集』で菊池寛賞受賞（一九九六年）、宮中歌會始御陪聽に招かれる（一九九六年）等であるが、一九九八年に歸幽された。

吳氏は終戦後もずっと和歌の勉強をしてゐた。そして、數人の同好の人々とひそかに和歌の勉強會をやつてゐた。當時、おほつぴらに、殊に日本語の勉強會等はとても出来ない時代になつてゐた。時が経つにつれだんだん緩やかになり、漸く和歌が作られるやうになつて初めて「臺北歌壇」を同好の士十一人で立ち上げた（「臺灣」と云ふ名稱は未だタブーであつた）。一九六七年のことである。

大正二桁、昭和一桁生れの臺灣人は、生れながらの日本人で、國語で物を書き、國語で思索し、果ては寢言までが國語だつた、所謂「日本語族」である。その人々が日本の短詩型文化にとりつかれて會を作り、和歌を楽しむことは常態である。また歴史的假名遣ひを用ひ、日本語の文語で和歌を詠むといふことは極く自然なことであらう。

終戦から六十六年、「臺灣歌壇」の前身「臺北歌壇」が成立してから四十四年、一九六八年に臺北歌壇歌誌第一集發行から通算百五十一集、この四十四年來の投詠者は五百

人にのぼる。

現在、會員は百人弱であるが、若い會員の吸收に努力してをり、平均年齢もだんだん若くなつてゐる。この歌人達が萬葉の調を大事にして詠作を續けてゐるのは、前記の吳氏の「萬葉の流れこの地に……」の遺詠の影響大なることは否めない。吳氏の一八九六年の宮中歌會始に招かれた時に作られた歌二首書き添へて筆を擱く。

宮中の歌會始に招かれて日本皇室の重さを思ふ
國思ひ背の君思ふ皇后の御歌に深く心打たるる

尙、本年三月十一日の東日本大震災に際して臺灣の人々が非常に關心を持ち、救援物資、義捐金等を送つて嘗ての日本の同胞から感謝されてゐることもさることながら、六十六年來、すでに異國になつてゐる臺灣の人々の大震災に際して詠んだ和歌も、日本の人々の感動を誘つてゐる事實を書き留めておきたい。

日本語のすでに滅びし國に住む

短歌詠みうた繼げる人や幾人

孤蓬萬里

（さいこんさん「台灣歌壇」代表）

私と國語

加藤忠郎

私が國語問題協議會に入會したのは、未だ若かつた頃である。手許にある一番古い「國語國字」は昭和四十七年十月一日發行で第七十二號なので、その頃入會したと思はれる。結婚した翌年の二十八歳だつた。會誌に依ると此の年の五月に小汀利得名譽會長が逝去されてゐる。此の頃の會合は世界經濟調査會の中で行はれてゐたと記憶する。

私は大學は技術系で、會員で技術系の方は少く、理事の市川浩さんしか知らない。何故國語に興味があつたかと言ふと、中學の國語の先生が熱心な先生で、現代文法の五段活用と古文の四段活用の違ひを理論的に説明してくれて、古文の文法の論理性に惹かれたのかも知れない。

大學卒業後就職した自動車會社で報告書を書く時等、結構正しい日本語を書くやう氣を遣つた。本協會に入會するきつかけは良く覺えてゐないが、怖らくは福田恆存先生の「私の國語教室」の記事を何かで讀んで本協會の存在を知つたのではないかと思ふ。入會してから講演會に出席したり、會誌を讀んだりして行く内に、段々と正漢字、正假名遣ひに惹かれて行き、自分でも書いてみようと思つたが、

實際に書き始めたのは、ずつと後年のことである。

自動車會社を辭め岳父の會社を手傳ふやうになつて、外部講習の報告書等を時々正漢字、正假名遣ひで書いてみたことがあつたが、餘り評判が良くなかつたので、止めてしまつた。假令身内の會社でも、ビジネスに關聯してゐる分野では中々難しい。その後、何年かして、日記を正漢字、正假名遣ひで書いてみようと思ひ立ち、今でも續けてゐる。日記は子供の頃から附けて居るので習慣になつて居て、良い練習になる。始めは分らない正漢字や送り假名があると、電子辭書で引いて居たが、段々引く頻度が減つて來てゐる。電子辭書には廣辭苑が入つて居て正假名遣ひも附記されて居る。しかも漢字をクリックすると漢和字典に飛んで行き、正漢字もチェック出來、中々便利である。昔、富山房の「大日本國語辭典」を購入したが、殆ど使つてゐない。

最近學士會の講演會で石川九楊氏の「縦に書け、縦に考えよ―縦と横の文化學」と言ふ講演を聴き、その感想文を學士會のサイトに投稿したことがある。縦書きで正漢字、正假名遣ひで書いてみた。そしたらなんと採用してくれて、しかも他の感想文は横書き、現代假名遣ひなのに、私の感想文のみ、その儘縦書き、正漢字、正假名遣ひで掲載してくれた。掲載畫面を紹介する。

http://www.gakushikai.or.jp/service/event_report/report_1121.html。少しは本會の趣旨のPRに資するのではないかと思考し、恥かしげもなく投稿した次第である。

(かとうただを・本會評議員)

石川九楊氏の「縦に書け、縦に考えよ」縦と横の「化学」の講演を聴いた。感想文も縦書きで書かずばなるまい。

縦と横は根本的に違ふ。「縦」とは天地の方向で、「横」とはそれを直角に横切る方向で、紙は対象世界であると言ふ。極めて印象深かつたことは學生に縦書きの文章と横書きの文章を書かせると、縦書きは重い、文章は纏まると言ふこと。それは重力を感じながら觸角と視覚を働かせてみると、「自制」と「自省」が生まれ、ブレーキがかゝつた文章になるからだと言ふ。一方、横書きは重力の抵抗が無いからいくらでも書ける。しかし「自制」も「自省」も無いから纏まりが無くなる。

漢字から日本人が産み出した假名を含む日本語の文章は筆で書くと横書きでは不都合で、縦書きが自然であることが良く分る。

漢字は左から右に改行すると手で書いた所を擦ることもなく、一見理に適つてゐるが、横書は左から右に書くので、水平に流れてしまひ、却つて右から左に改行する方が安定し、これが定着したと言ふ説明も納得できた。

この講演内容が書かれてゐる著書は讀んではゐないが、戦後からの世相の酷さは全て日本語の横書きやワープロ・パソコン・ケータイが原因かのやうに述べられてゐるのは、強引過ぎると言つた書評があつた。ただ、その分を差し引いても講師の言はんとすることは諒とする部分が多かつた。

(東大・工、加藤 忠郎)

日中英 ことばの雑学 (二)

高田 友

健太…(前回の續き make both ends meet の分析)「兩方の端つこを合ふやうにしてやる」だから、收入欄と支出欄がきちんと合ふやうに生活して行くことですね。そして、「帳尻を合せる」はこの英語の直譯なんだ。

高田…これも、中國語で同じ表現をするんだ。もちろん、中國語も英語を直譯したものなんだがね。他動詞はちよつと説明が厄介だから避けるが、自動詞の「帳尻が合ふ」を「帳尾符合」と言ふ。

健太…なるほど。よく解ります。「尾」が「尻」ですね。

高田…ところで、さきほどの「我因她陷入戀了(ウオーイ ンターシエンルリーエンラ)」だが、「因」は「ゆゑに」だね。「彼女ゆゑに戀をする」といふ理窟なんだ。

「紫の匂へる妹を憎くあらば人婦ゆゑに我戀ひめやも」といふ歌は知つてゐるよね。

健太…大海人皇子が額田王に贈つた歌ですね。

高田…この「人婦ゆゑに我戀ひめやも」をどう譯すかね。

健太…「わざわざ人妻に戀なんかするはずがあらうか」でせうね。

高田…うん。みんなさう誤解してゐるね。

健太…違ふんですか。

高田…ニュアンスは結局さういふことなんだが、君は「ゆゑに」に特別の意味を持たせて、「わざわざ」と譯したんだらう。

健太…はあ、さうですが。

高田…「戀ふ」は自動詞で、「君を戀ふ」とは言へない。「君に戀ふ」ならいいのだが、それを「君ゆゑに戀ふ」といふこともあるんだ。つまり、この「ゆゑに」は、「戀といふ感情に陥つた原因」を指してゐるに過ぎないから、「わざわざ」といふ意味はないんだ。結果的には、人妻が對象だから、さういふニュアンスは出てしまふんだがね。

健太…なるほど、「人妻ゆゑに戀ふ」は、單に「人妻に戀をする」といふ意味なんですね。

高田…この「ゆゑに」は、中國語の「因」の影響を受けてゐるんぢやないかと僕は思つてゐるんだよ。

健太…でも、この中國語の言ひ方は、英語から來てゐるとおつしやつたぢやないですか。英語に關係があるのだつたら、萬葉集の歌にその影響が及んでゐることはないでせう。高田…いや、「戀に落ちる」といふ言ひ方自體は英語の影響だが、「君ゆゑに戀をする」といふ言ひ方は、本來の中

國語にもあつて、それが古代の日本語に影響を及ぼしたといふことは考へられるんぢやないだらうか。

健太…それは壯大な研究になりさうですな。

高田…古い時代に、中國語が日本語に影響を及ぼしたといふ例は、意外に多いんぢやないかと僕は考へてゐるんだ。

たとへば、萬葉時代には「飯や食ひたる」といふやうに、疑問助が主語や目的語の後に附くことが多かつたが、後世になると、「飯(を)食ひたりや」といふやうに、文末に飛ぶやうになつた。

中國語の一般疑問文は語尾に「嗎(嗎)」を付けて、「你吃飯了嗎」(ニーチーファンラマ／「吃」は「喫」の簡體字で「食べる」などと言ふ。その、語尾に疑問助詞をつける語法が日本語に影響を與へて、「飯や食ひたる」が「飯食ひたりや」になつたのではないかと僕は疑つてゐるんだがね。

これは、資料の残つてゐない時代のことだから、研究しても結論は出ないだらうね。

かういふ推理をするのは、君なんか得意なのぢやないだらうか。

學者の言ふことを鵜呑みにするだけでなくて、自分で自由に考へてみないといけないね。

健太…日本語はアルタイ語族、中國語は支那西藏語族だと聞いてゐます。系統は違ふのに、そんなに共通點があるんですか。

高田…語族といふのは、系圖みたいなもので、血統關係を表すんだ。日本語、韓國語、滿洲語、蒙古語などは、もともとは一つの共通の祖先(祖語といふ)から別れて來た。なんと西の方、トルコ語もアルタイ語族だといふんだ。

トルコ語は、單語を日本語に置き換へて、そのままの語順で讀んでやると、かなり日本語らしい日本語になるといふから驚くよ。

健太…あ。聞いたことがありますよ。トルコ人はもともとは中央アジアに住んでゐたのが、西の方に移動して行つたんですよね。もともとの居住地を考へると、アルタイ語族であるのも不思議はないですな。

でも、滿洲語は中國語と同じ系統だと思つてゐました。清朝を立てたのは滿洲族ですから。

高田…全然違ふ言語を持つ民族が入つて來て、中國を支配することになつた。どちらの側も、相手の言語を學ぶのに苦勞しただらうね。

健太…清朝といへば、太宗(第二代)「皇太極」といふ人がゐて、「ホンタイジ」とルビがついてゐます。何のこと

かさつぱり解らない。

高田・皇太極は、太祖ヌルハチの息子なんだが、母親の身分が高かつたので、小さいうちから後継者と決まつてゐた。

それで、中國語を使つて「皇太子」と呼ぶことになつた。「皇太子」は中國語では「ホワンタイズ」と發音する。滿洲語では、少し訛つて、「ホワンタイジ」になつた。それをまた漢字に戻したときには、もともと「皇太子」だつたといふことが忘れられてゐたんだらうね。「ジ」の發音に近い「極」を使つて、「皇太極」としたんだよ。「ホワンタイジ」がさらに崩れて「ホンタイジ」になつたのは、*hwa(hua)*の音が滿洲語になかつたのだらう。あるいは、片假名表記したときの日本人の發音の都合だつたのかも知れない。

健太・なるほど。

高田・日本語と中國語のやうに、系統は別でも、他の言語に影響を與へるといふことは別段不思議なことぢやない。特に、日本語は中國語から漢字といふものを體系的に受け入れたのだから、血は繋がつてゐなくても、例へば姻戚關係があるといふやうな間柄ぢやなからうか。

健太・なるほど、姻戚關係か。うまいことをおつしやいますね。

在

嚴島隨想 遍照金剛弘法大師空海

安東路翠

(山野涉獵時に八葉臺を見出す)

大鷹の迎へし八葉の山の嶺に隠るる杜は夜光を發す

(西日本の原風景をゆく)

栃紅葉銅鐸出土せし村は照る陽に映えて大師を迎ふ

(神樂は村落の復層をなす歴史を語る)

若者の御足たくましき祭り火や山ふところの村の衆なり

(神樂人は今も神そのもの)

若衆の身もかるやかにつれ舞へる神樂は神の領域に立つ

(神佛混淆の原點)

日の出づる神と佛の界なりき法の弘がる蜻蛉國原

(内海は斯くたやすく渡りうる)

瀬戸内の海を渡れる小舟あり左右にふりし船も輕やかに

(神祕の大風の一瞬)

朝なぎに島の御影が寫りたる水面に立ちし罔象の華やぎ

(空海の御口に明けの明星が入りたまふ)

明けの星貫通せるは眞なり行の最中の潔き法體

(國見ヶ丘に立ちし常なる感慨)

國見丘高嶺たどれば山ツ神は今早けく雪となりけり

(眞言宗は呪のひかりに満てる)

ひろやかに普く照らす咒のひかり智慧と學びに満ちし法界

嚴島に色濃く遺されてゐる空海傳説、そして太古からの巨石、鑛脈、錫杖の梅、空海の消えずの火、岩盤に彫られた梵字、海濱に湧く眞清水、大願寺、大聖院等現今まで生きつづける空海を偲ぶ。

(御母と共作の法華經の御寫經あり)

母希ふ奇師の尊き法の道菩薩のをしへ傳へ繼げとて

(御母、晩年に九度山に住ひ常に空海を慈しむ)

武骨なる山入り嫌ふ御母を光りも柔く眉月は撫つ

(佐伯の豪族としての父)

氏傳ふ佐伯の父は岳山へ恐るるものなき太刀振るひ入る

(貴ものと云はれた幼兒の心は動く)

秋山にせゝらぎの音響きゆき見上げし峯は大錦なり

(御母御寫經の法華經の文字すべてに空海は佛を描く)

綿々と綴れる母の御筆先に法華經學びし時をいとほしむ

(行方を佛道修行に向けるか)

水沼の枯蓮に觸れし風花のいづくともなく行方消えしか

(空海作の詩文より)

水中に寫れる月は虚なりき心實一ツの理を喩ふ

(神佛混淆を基本となされる)

空海の大日如來の曼荼羅の兩部に古き神を重ねん

(阿字の觀想の御時)

阿字觀に大日如來と響き合ふ咒と定背ひしかるきこの身に

(空海の詩より)

般若とは慈悲の眞のひろがりの人に向けゆく救世の御心

(寂然と禪定の御時)

冬の日の光の中を巖に坐す弘法大師の影の静けき

(空海の廣大無邊の御心に呼應する經)

大いなる金光明の鳳翼と廣大無邊の人のこころね

(最澄さまに贈りたかりし大自然の教へ)

理趣經に大自然説く祕教あり大日如來の絶對の意趣

(眞の教へは宙である)

ひろがりの無限の教へ究極の神と佛と宇宙の知音

(をしへを巡錫し今にいたる)

經典をしへもありのまゝに受く巡錫ひろく眞の光輪

(狛犬の阿吽の表情の中に教へを認識す)

是にこそ世の教説をときみたり阿吽を收む狛犬の呼吸

(鑛脈資源に對する直觀力)

霧霽れし國の奥なる高き嶺の水銀を生む山の連なり

(島は須彌山であり日月星辰がめぐる)

海中の島の彌山のいたゞきに神の饗宴明るる光に

(宗教家空海の坐すところ)

靜謐に森嚴に坐す空海の不生不滅の魂の杜

(菩薩は時として眼前に驗する)

雲嶺に菩薩の立ちし故實あり雨雪の後方霧霽るる時

(蓮花にはそれぞれ佛が坐してゐる)

泥中に蓮の開きし韻聽かば天宮照らす佛座せり

(空海の國寶類は現在もしつかり守られてゐる)

萬卷の經典收む經藏山嗣ぎ來し寶牘の不壞の輝き

(安幾國の繩文時代早期の歴史と神を偲ぶ)

いにしへをたどれば二萬年の史の可畏きを生む八百萬の神

(佐伯氏空海の、繩文彌生時代にさかのぼる自負)

繩文の習慣が今に傳へ來る寒ぎの神の佐田彦の杜

(丹生神社の姫をまつるを重要とする空海の御心)

丹生比賣のいはれは古きみ社の巫女の織る幟そは神衣ぞ

(宗像三姉妹をまつる嚴島に塞の神あり)

姫神に守られ嵐の舟を護る舳先に彫りつく塞の大神

(空海の丸きに對する畏敬は、古代の神石に及ぶ)

嚴島のさやけき丸き玉の石久那斗の神と舟を守れり

(神祕の嚴島に燈し續けた火は、同行二人の精神と共に、世界の人々を魅了する)

幾世紀山に焚かれて汝とありと燈り續けし炎は傳ふ

(山海の長の御父、名門御母の阿刀氏の薰陶を受く、その至寶の思ひを)

山は登登至嚴なり海は鑿々至寶の界なり

(創建推古天皇の御代と傳ふ嚴島神社は、歴史と傳説に満つ)

嚴島遠き歴史と神宿しいざよふ波に悠揚と浮く

(あんどろろすい 國語問題協議會評議員)

後書

このところの講演會では、元々の日本語はどのやうなものであつたかといつた話題が多い。藍川由美さんが、日本語の歌は歴史的假名遣に據らないと、正確な意味が傳はらないと主張されてゐるが、今號の市村眞一先生の御話にも同様の話が出た上で、日本では口語の美しい形はまだできてゐないと結論されました。

この三月、「國語を考える国会議員懇談會(國語議連)」では、本會創立者の一人福田恆存先生の御息、福田逸氏が講演をし、熱を籠めて戦後の國語政策を難じましたが、果して臨場の官僚達に通じたものかどうか。偶々産經新聞に載つた伊原吉之助氏の、「官僚榮えて國滅んだ昭和・官僚は國家を運営しても責任はとらない」といふ評論を讀んで、同感もし納得もしましたが、それだけに背筋が寒くなる思ひでした。

上西理事の取上げた「國語大變」からも戦後の國語政策の定見の無さが浮び上がります。國語の混亂が國の文化、ひいては現實生活の混亂にも繋がつてゐます。伊原氏ではないが、國語に理解のある良き指導者を育てることが急務です。

平成二十四年四月

事務局長 谷田貝常夫

前『國語國字』一九六號の訂正

（賛助會員入會の御願ひ）のところでのお祓ひの言葉を次のやうに御訂正下さい。

「祓ひ給ひ 清め給へ」は、「祓へ給ひ 清め給へ」であると神職よりご指摘がありました。

））正統表記のための実用工具紹介））

「國語國字」通巻DVD 本會會報創刊號（昭和三十五年）より第一八五號（平成十七年）迄の全頁を

DVD一枚に電子畫像掲載。税込價格八、四〇〇圓 NPO文字文化協會扱ひ 電寫 03-3753-1429

「國語問題協議會四十五年史」 B5版三三六頁 税込價格三、一五〇圓 NPO文字文化協會扱ひ

「今昔文字鏡」単漢字十六萬字版（CD-ROM）

諸橋大漢和辭典收録の約五萬字、古くは甲骨文字から梵字、中共の簡體字まで、多種多様な文字を收録。廣大な漢字世界を體系づけ、検索、印字等その用途は無限！ 税込價格二九、四〇〇圓 紀伊國屋書店發賣

インターネット URL

國語問題協議會 <http://kokugomondaikyo.sakura.ne.jp/>

傳言板 <http://dhatena.ne.jp/kokugokyo/>

關聯電網

文語の苑 <http://www.008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/>

文字鏡研究会 <http://www.nojikyo.org/>

横濱五十番館 <http://literature.jp/>

旬申申聞（「契沖」） <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>

平成疑問假名遣（高崎一郎） <http://homepage3.nifty.com/gimon/>

日本漢字教育振興協會 <http://www.kanji-kyoiku.com/>

高池法律事務所 <http://www.takaika.com/>

地獄の箴言 <http://kimura39.txt-nifty.com/>

言葉の救はれ―福田恆存論（前田嘉則） <http://logos.blogzine.jp/1/>

現代國語への處方箋（蓮沼利夫） http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/

平成二十四年四月二十五日發行

創刊昭和三十五年十二月一日（通巻百九十七號）

編輯・發行 國語問題協議會

東京都大田區久ヶ原三丁目二十四の六
郵便番號 一四六一〇〇八五

電話 〇八〇—三四一一—五五〇一

電寫 〇三—三七五三一—四一九

電郵 yatagai@f03.itscom.net

URL: <http://kokugomondai.kyo.sakura.ne.jp/>